

江戸名所圖會

十七

西垣文庫  
文庫10  
6556  
17



文庫10  
6556  
17

西野之命

下野岡

上野のあまを指しり

小田原北条家の古文書に下野上野のあまを指しり云々

武藏國風土記殘篇曰 豐嶋郡下谷岡貢鹿狍兔狸山鵠雉等又

條天神宮 東叡山の雲の麓瀬川氏の比あり祭神少彦名命

菅神の條の實永十八年慈眼

當社あり東叡山のうらあり一實永寺草創の御御連

夜白本神事を後行す 菊田の涼云其地の上野 毎歳節分

北國記行云 正月の末しうすの日の出に優遊くすり法坐の社

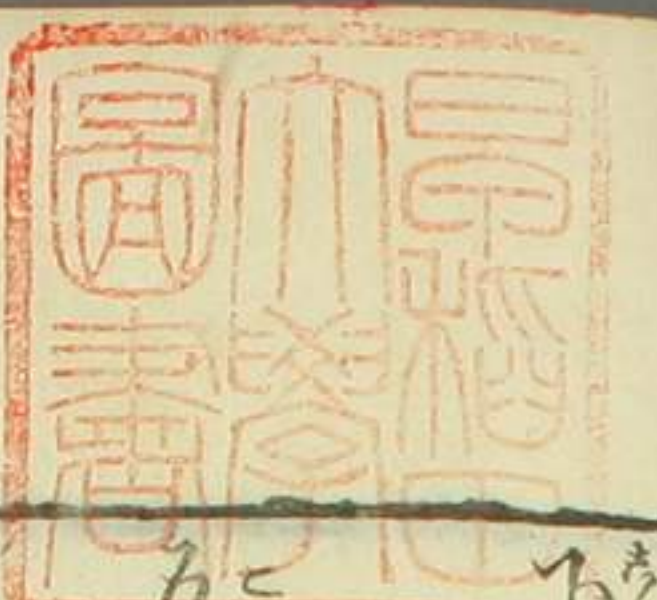
五條天神と申す折あり枯る茅原を焼く

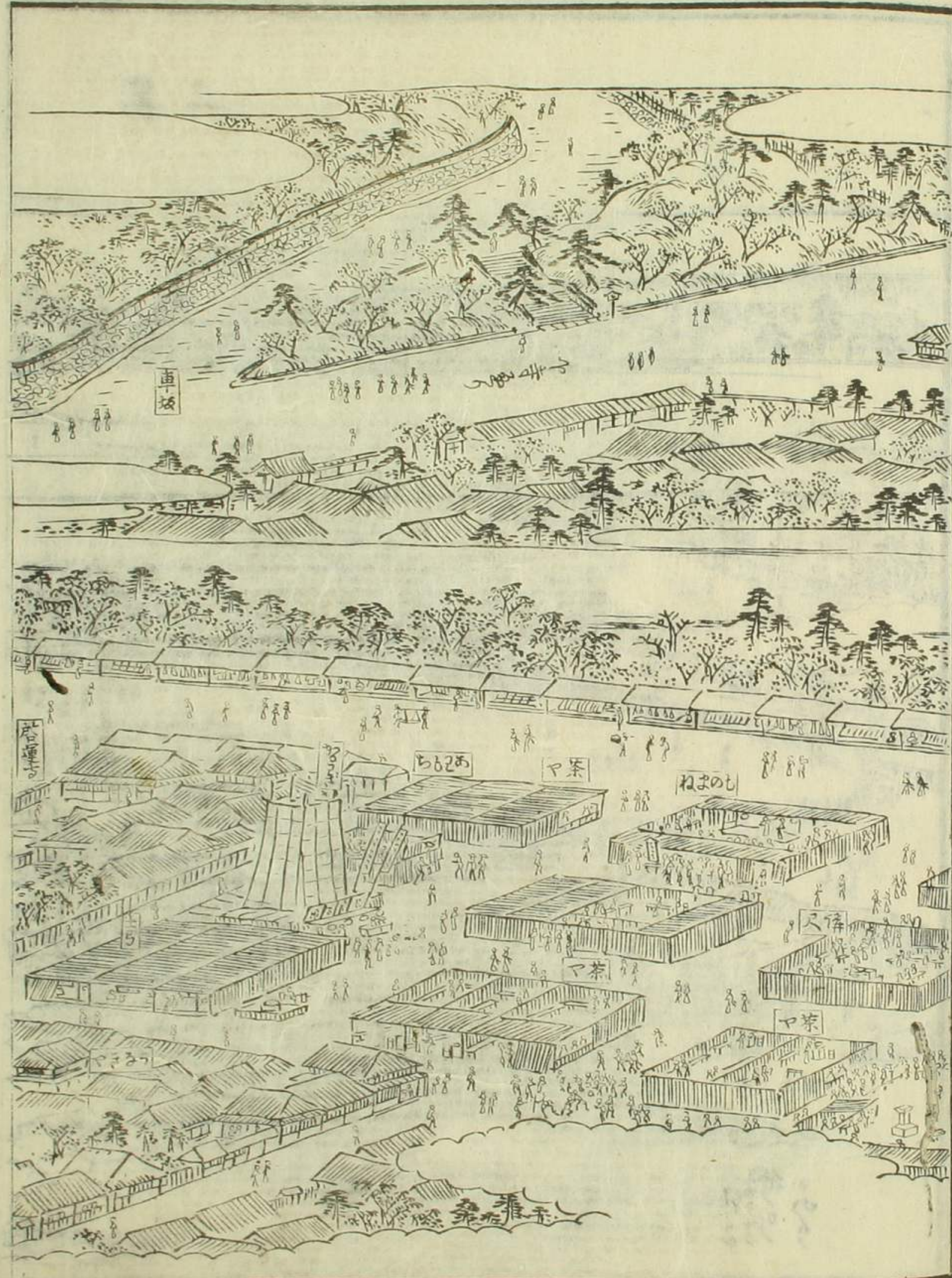
響りをさしてまれの初草よむの日の出のそが下野 竟惠

宝王山常樂院 長福壽寺と号す天台宗五條天神の南忍川の向

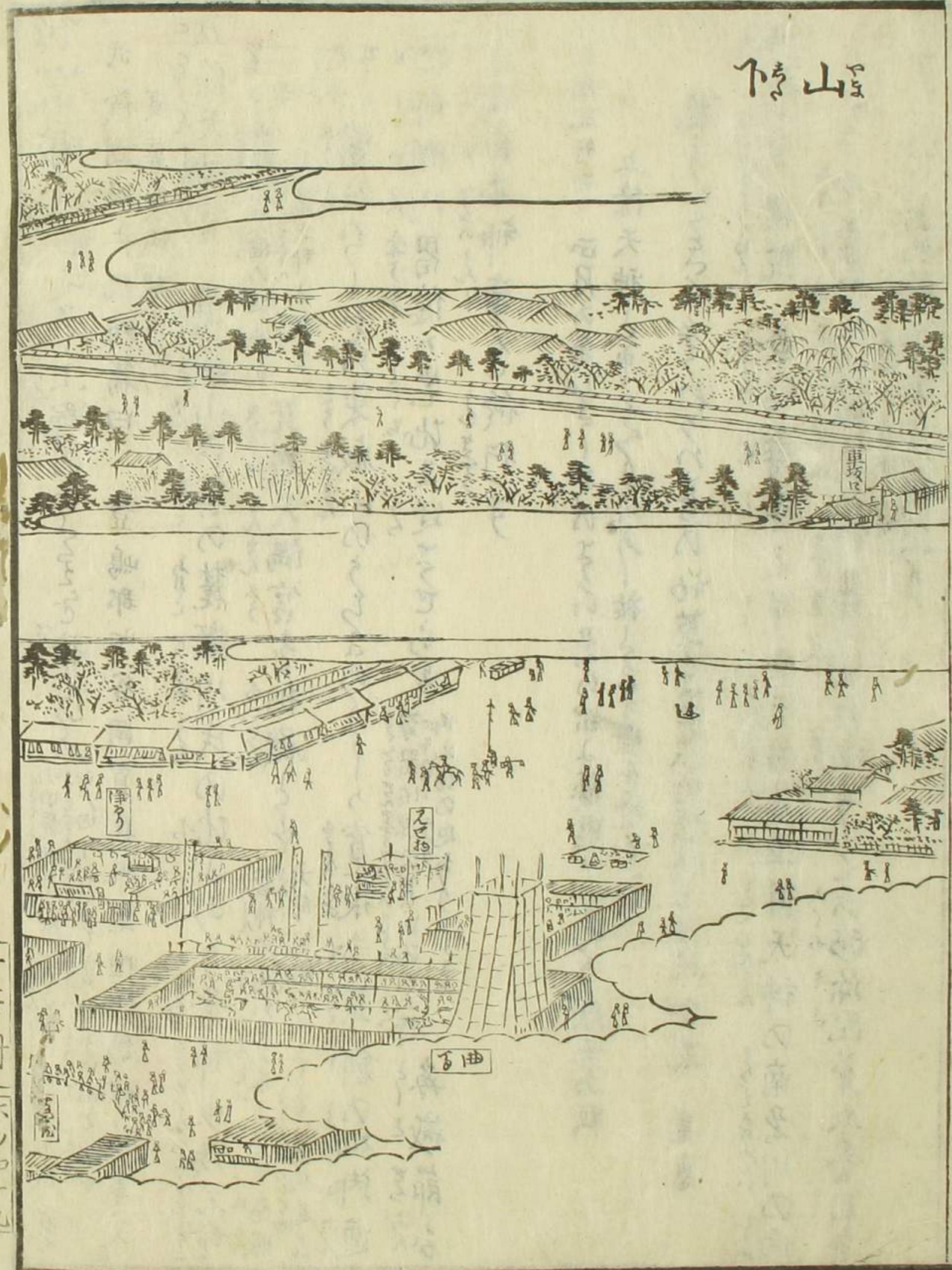
より奉る所法院如來の行基大士の作りて西法院茅五番目

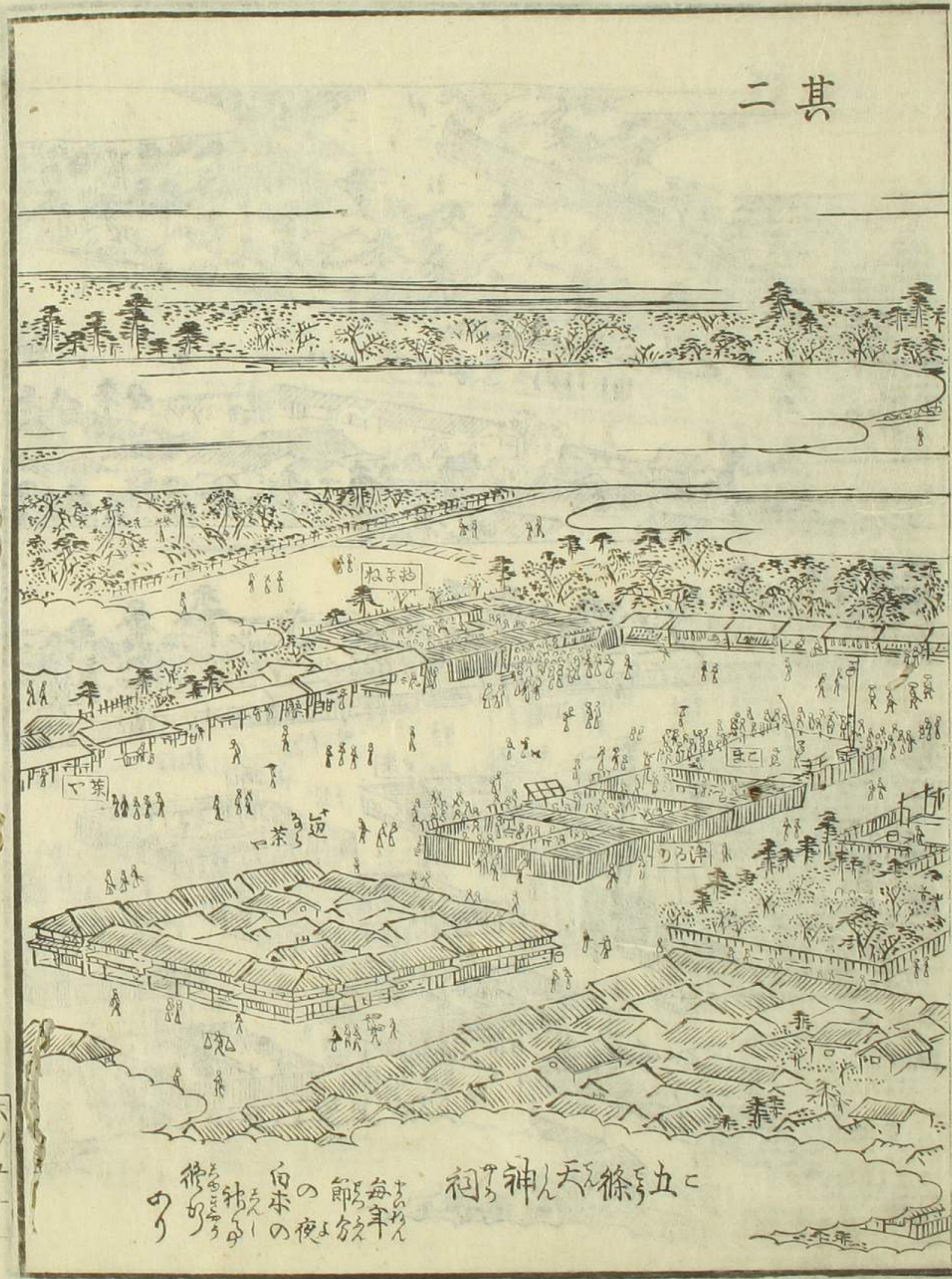
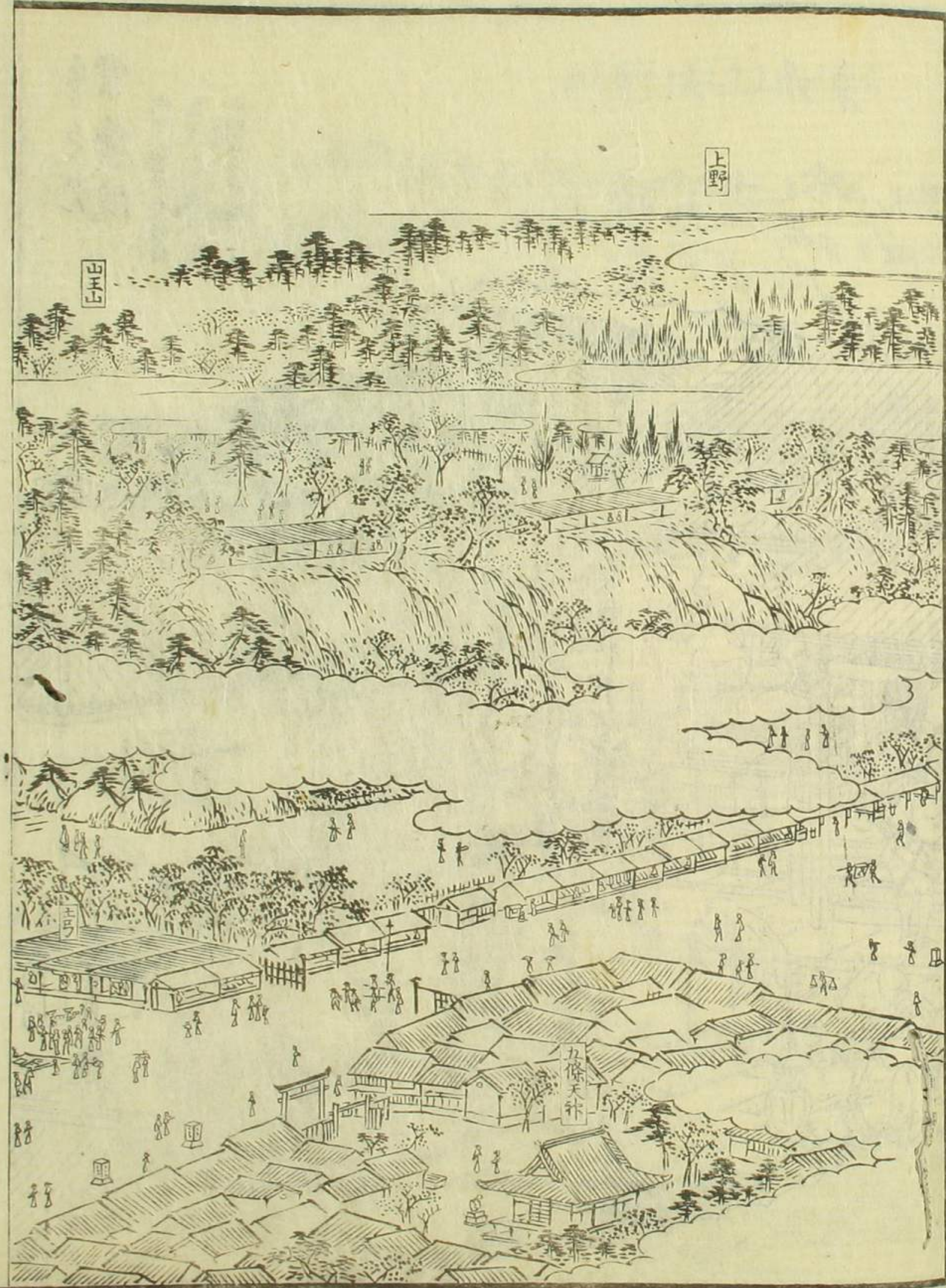
至二月八月の彼岸中甚賑り





下山

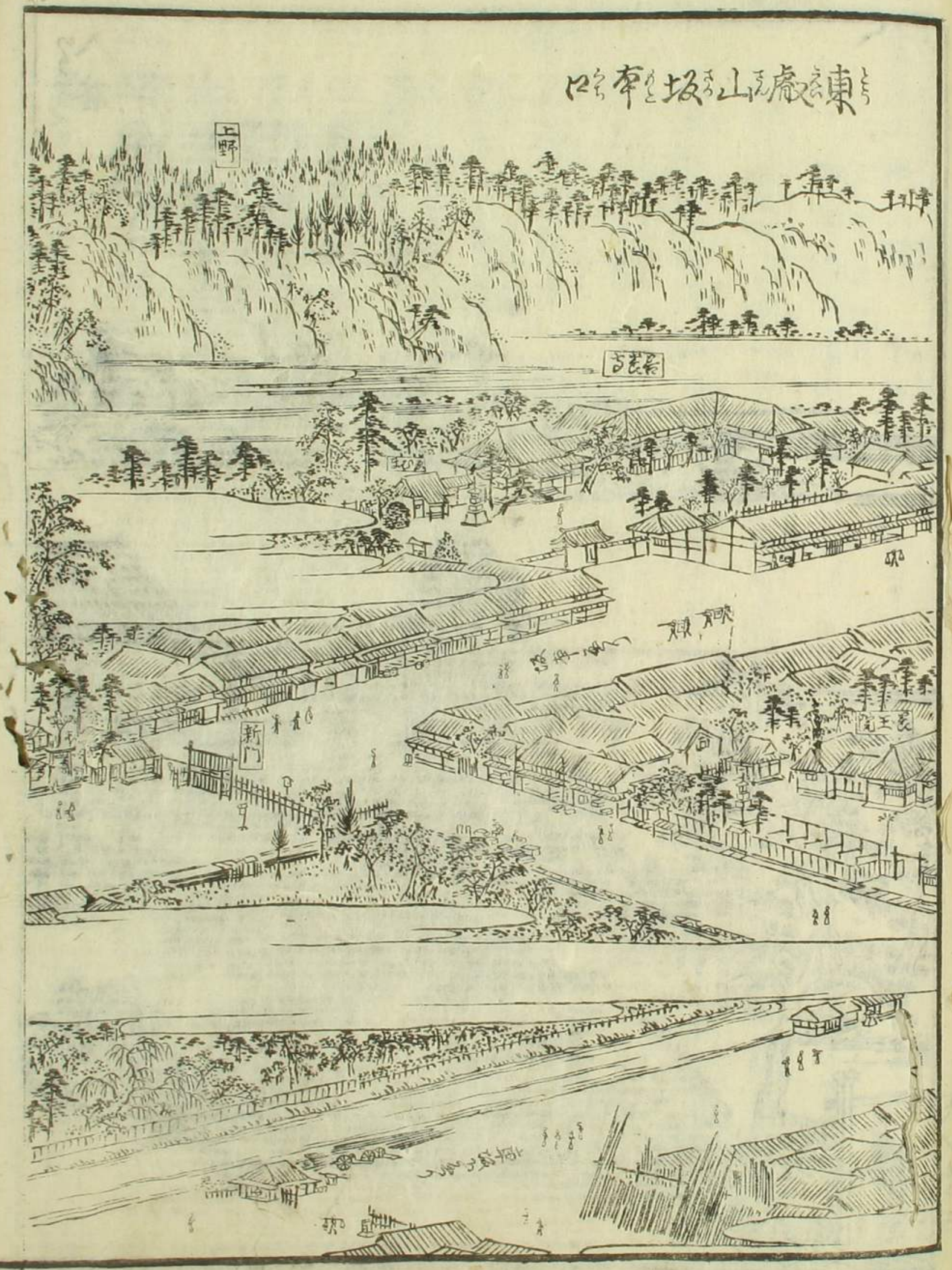




毎年の節の夜に  
 白木の  
 神天  
 祠に  
 五に

六ノ九ノ十

東麓山坂本



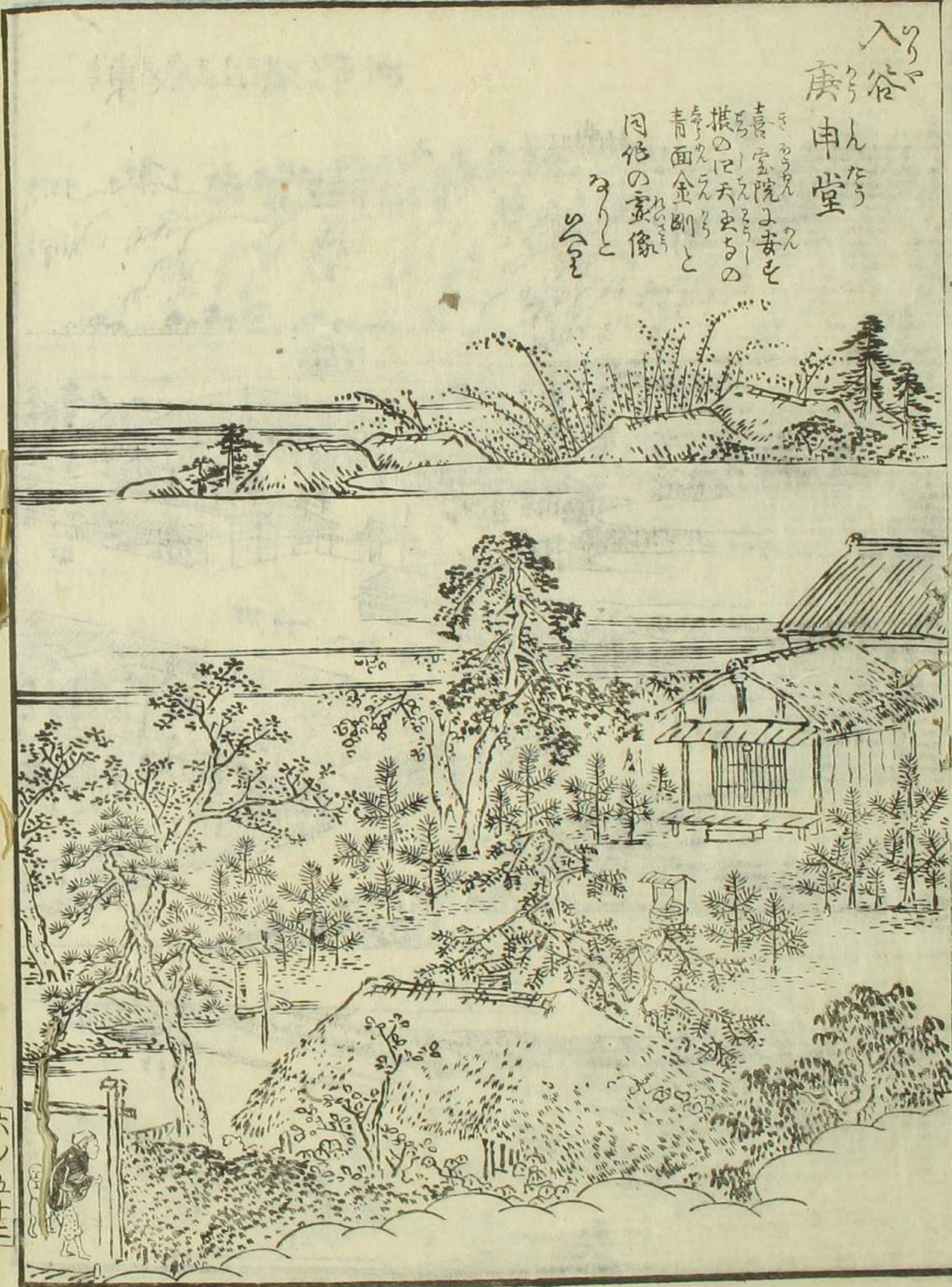
常樂院

六阿弥陀五菩薩  
ありまき秋二夜  
の袈裟中振へ



入谷 庚申堂

喜宝院よまを  
撰のに天竺の  
青面金剛と  
同位の畫像  
ありと



金光山親玉院

下管坂奉壹丁目の南より天台宗より七住持の  
御体内大木の辺りよりと慶長の頃今の地は遷りて  
古の三親院と号するを宝永年間今の名に改むとつり當寺は釋迦  
の涅槃像の画軸一幅を藏せし上慈眼大師の讚あり三國傳燈大  
僧正天海書とあるとつり毎年二月十五日是日洋す

藥王山善養寺

延壽院と号す同石坂奉壹丁目の左側より天台  
宗より奉尊の藥師如來を安す  
當寺は天長年中慈覺大師の草創奉すも同大師  
の作なりといふ額に圓滿の二字を刻し黃壁木庵老人の筆あり

境内に輪窓堂あり輪窓の像の運慶の作なり正月十七日祭  
諸君集む  
或人云く當寺圓王の像は所別長利學校より  
小野照崎明神社 同所三丁目の右側より祭神奉儀小野翁の  
靈ありといふ社傳あれとも詳れなき姑く之を當社の坂

小野照崎明神社

同所三丁目の右側より祭神奉儀小野翁の  
靈ありといふ社傳あれとも詳れなき姑く之を當社の坂

率の鎮守として八月十九日を以て祭日とて別當の天台宗として

小野山嶺松院と号す

或入云當社の其先忍り出まを堂あり一頃その傍ありと小野の林と稱す小野首と云  
く儒教を崇敬し所別是利ノ學子校を闢く故其後彼地よて當堂の傍に堂の傍に堂の傍に  
親ノ系記を執行せらるもやうに切らぬ例に準して堂を出るを堂の傍に堂の傍に堂の傍に  
近の後の池に佛堂あり又云當社の池主橋を舟の使者ありける白狐夜毎に尾の末  
尾の末に三ノ台嶺の松樹に映しけれの尾の先鳴といふ意もよく彼此混交小野山嶺と

佛迎山安樂寺

金松あり正保年中正蓮社意的新當寺を創

五と

御宗居の舊地ありと云

奉尊の寶冠の阿弥陀如来より洛陽

一心院の末より捨立一流の淨域たり昼夜不退念佛三昧す

殊勝あり

寶鏡山圓光寺

根岸の里より濟家の禪林として釋迦如来を

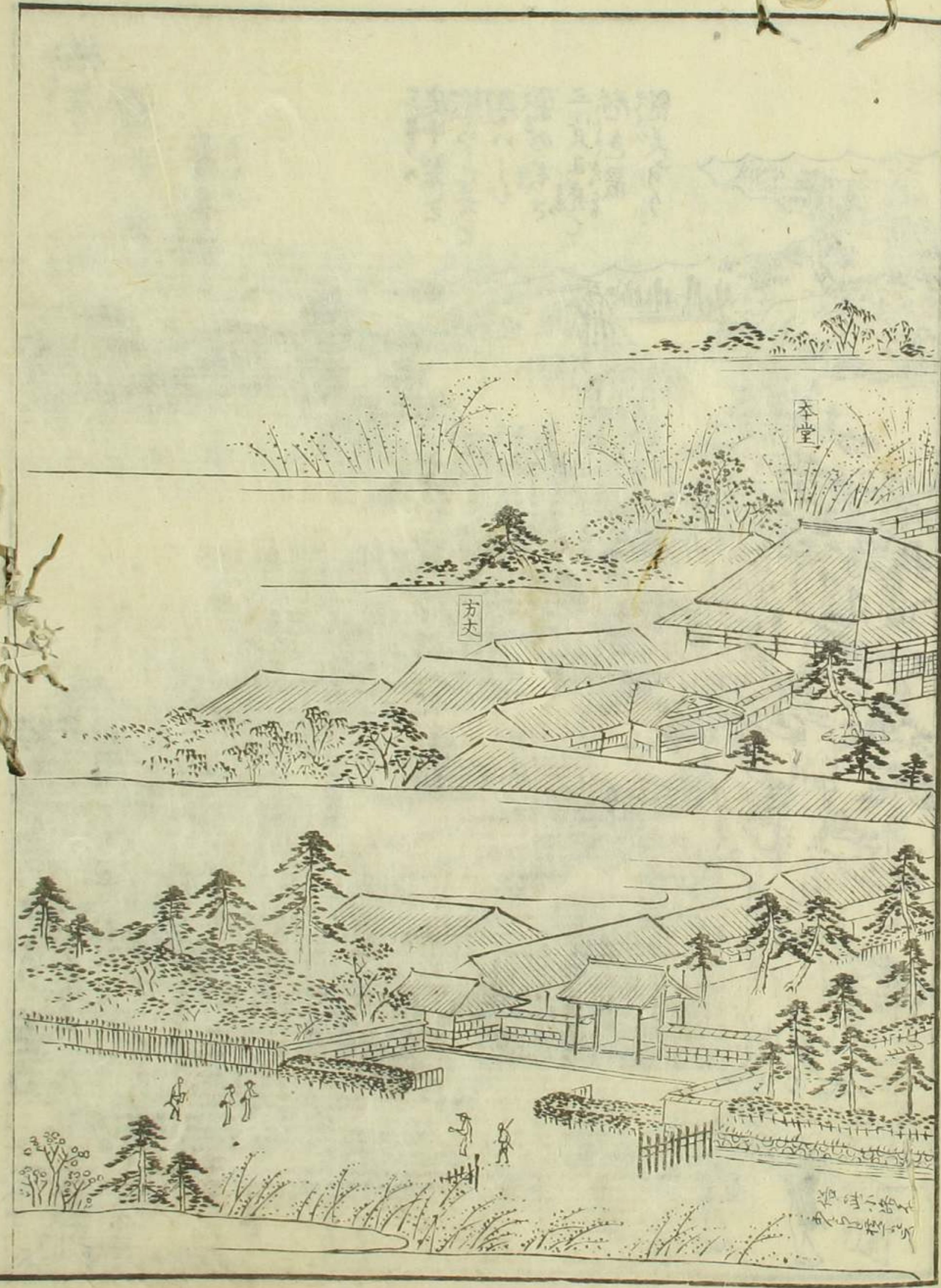
奉尊とて當寺庭中小紫藤ありて花の頃ハ一奇觀たり好ま倍

向あれ銀葉寺と稱せりやうに堂前ニ鏡の松と唱ふる名樹あり

鎮守の辨財天ハ弘法大師の作なりといふ

小野照崎神社



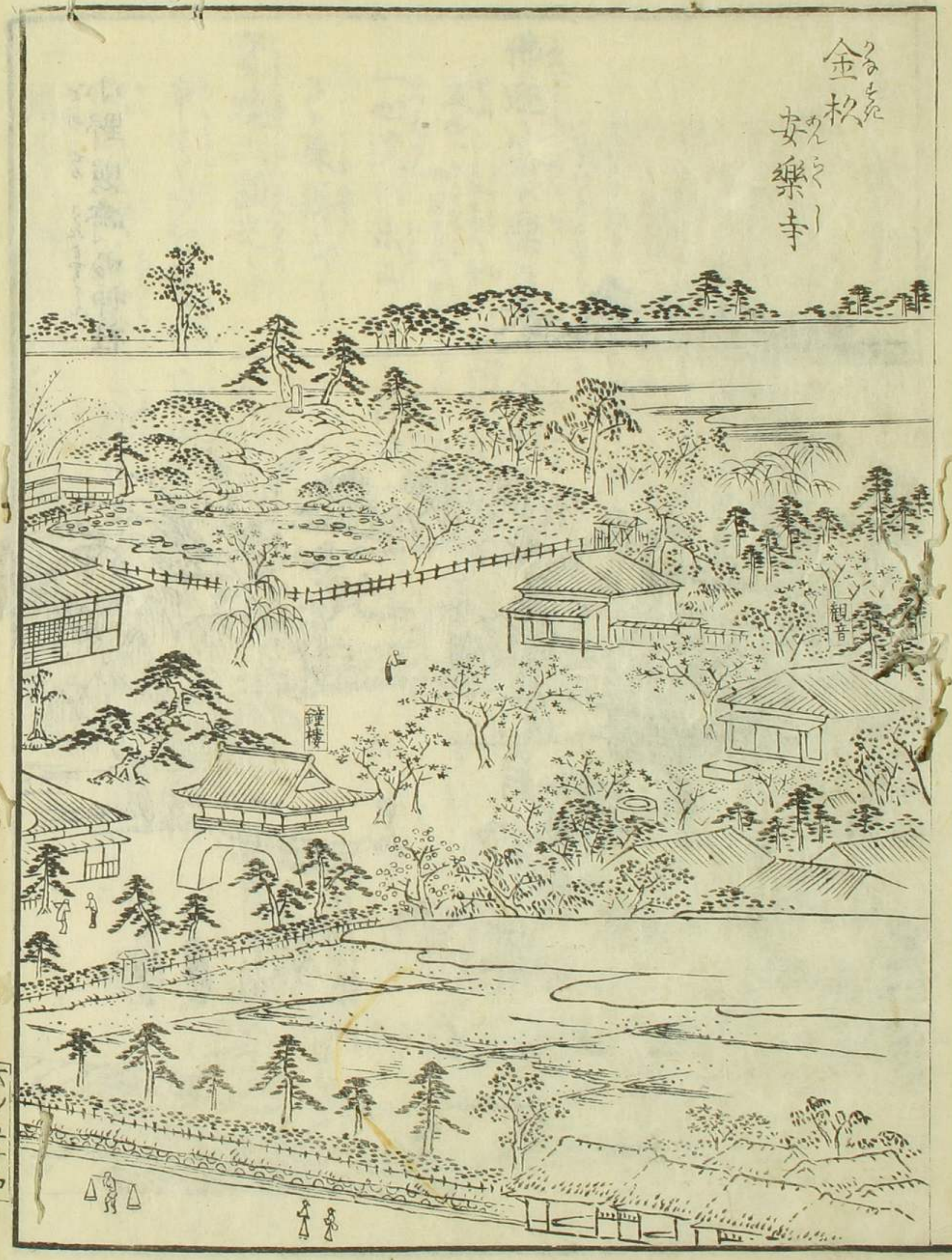


本堂

方丈

大徳寺  
安楽寺

多  
金  
松  
安  
樂  
寺

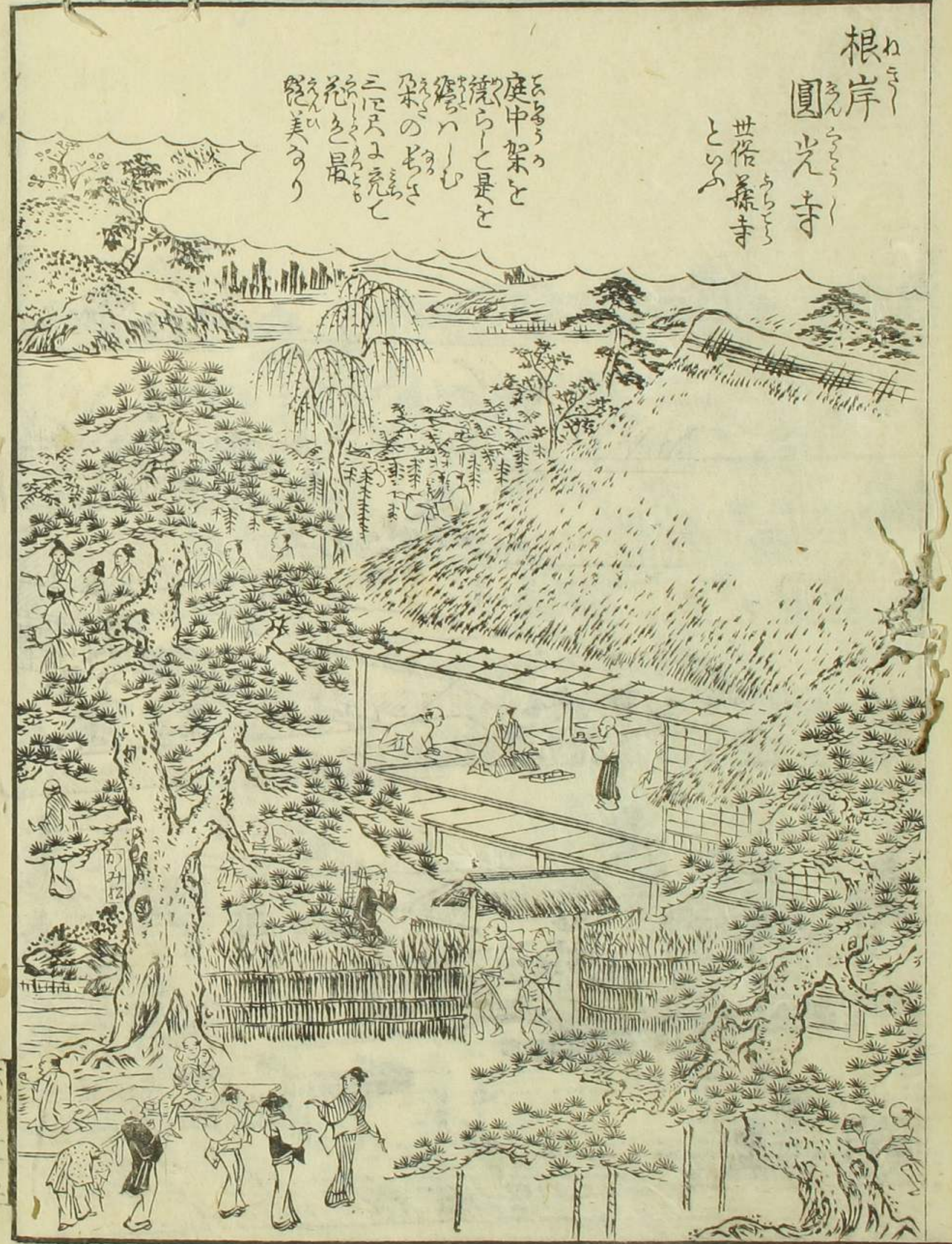


観音

鐘樓

六  
八  
五  
十  
四





根岸  
圓光寺

世俗  
とりの

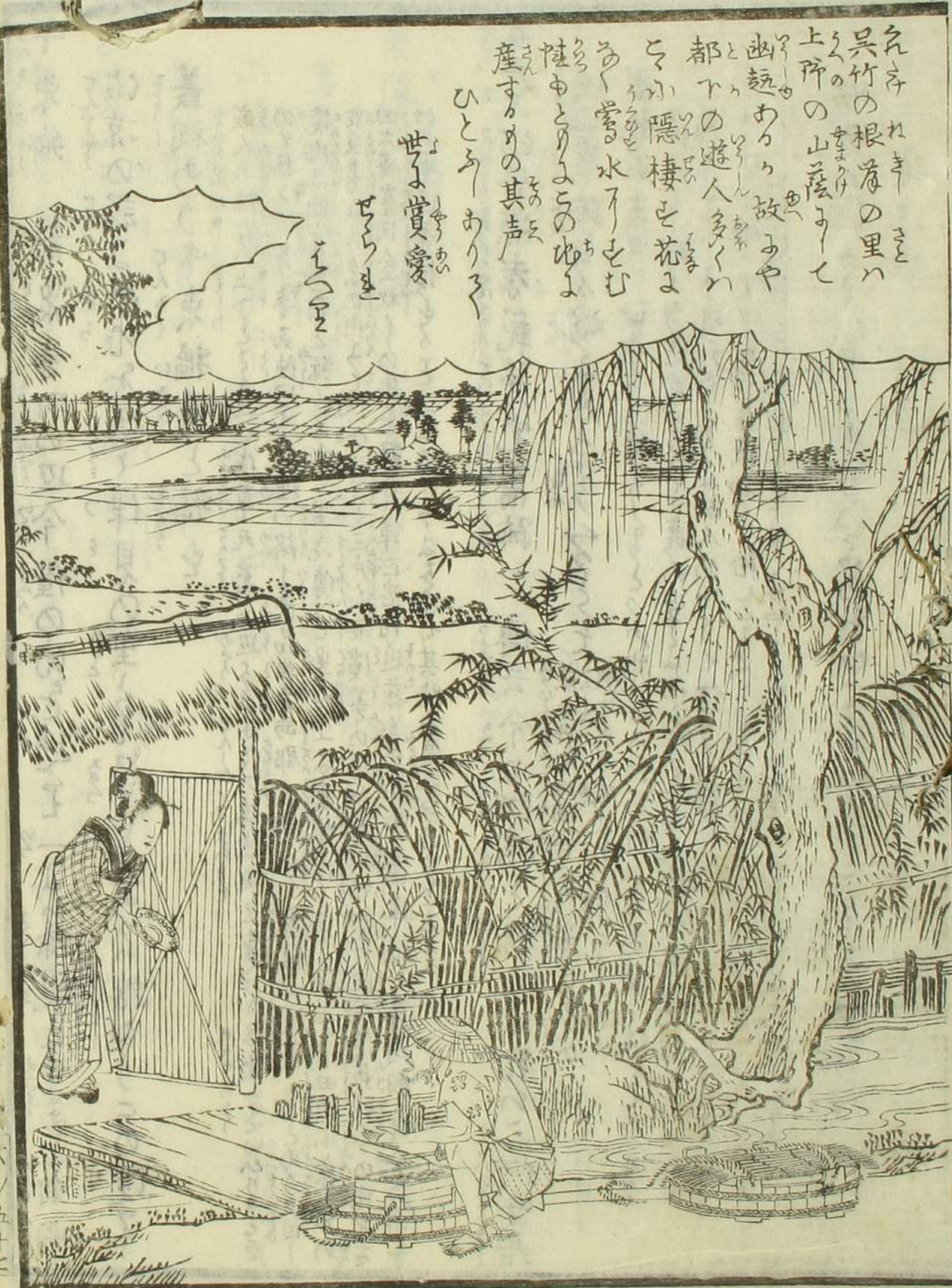
庭中架と  
徳らし是と  
花の色最  
然美なり





名存れきまき  
 呉竹の根着の里の  
 上の山蔭うす  
 幽趣あり故や  
 都下の遊人多く  
 小隠棲之花  
 あり常水不む  
 陸ゆとりよの地  
 産するの其声  
 ひとああり  
 世に賞愛  
 あり

一七五  
 五十七



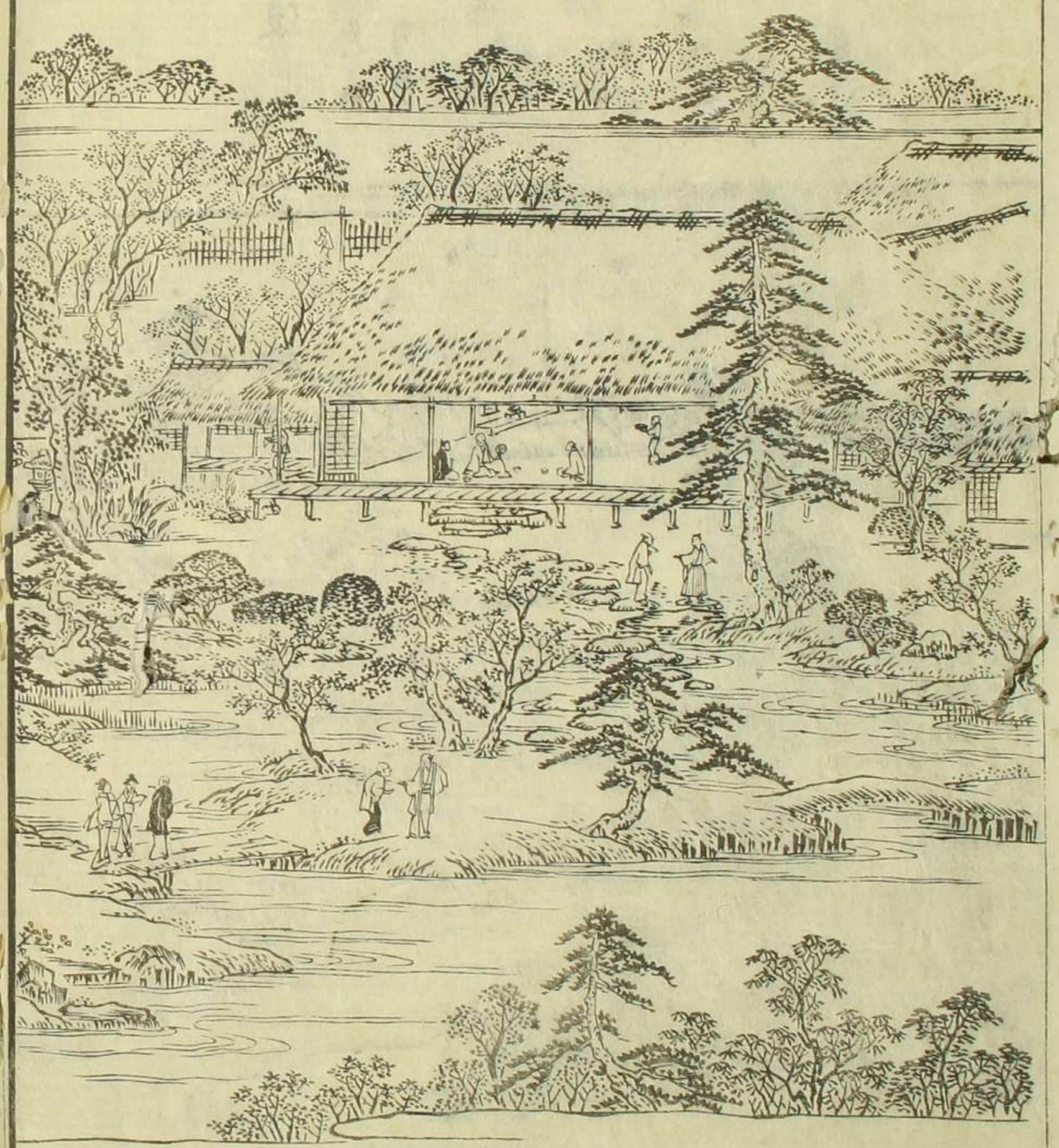
田國雜記  
 霜の後  
 あつらふま  
 りり  
 時雨の  
 ぬいの  
 岡の  
 ねもりの  
 ち  
 道真准后



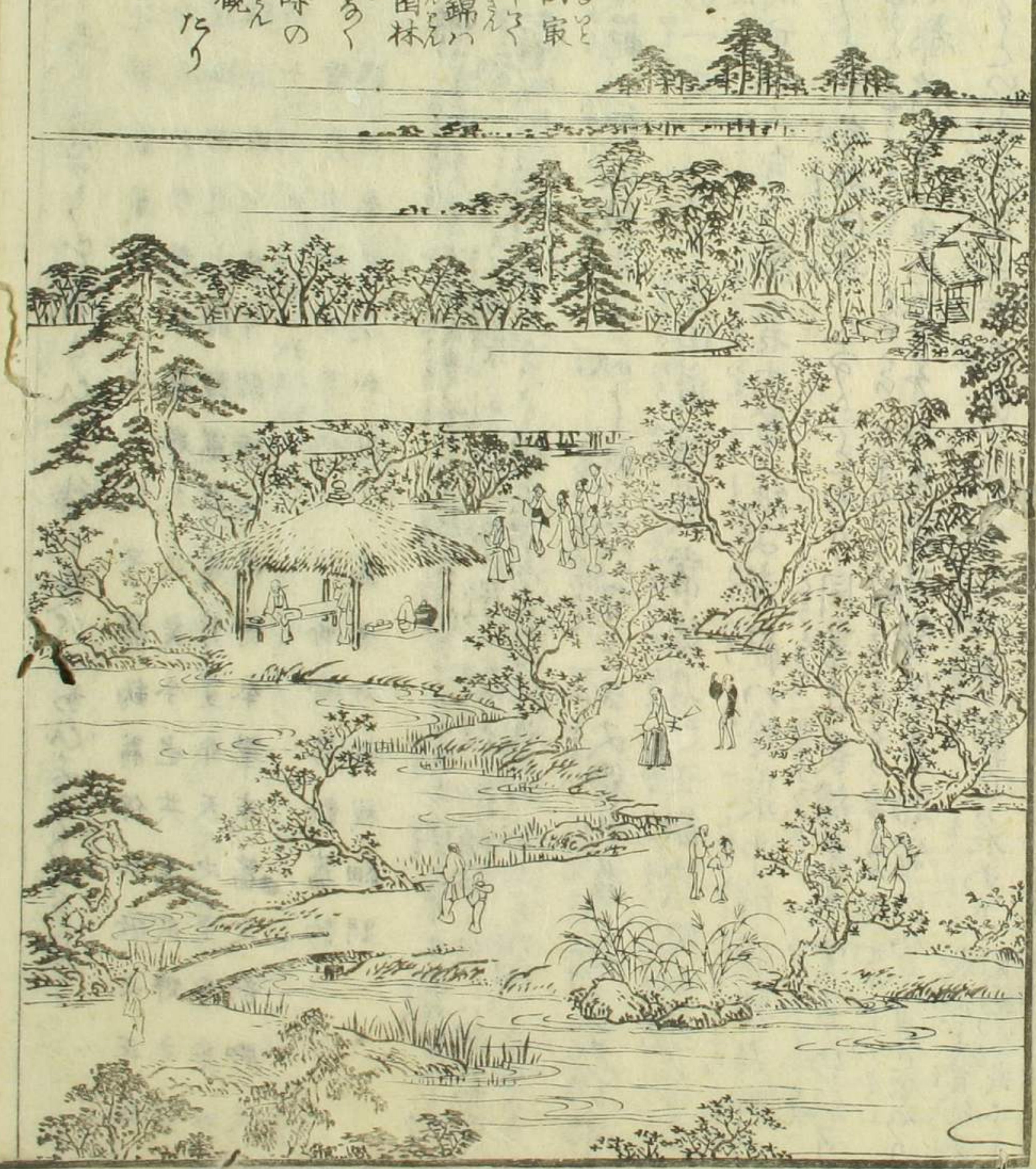
時雨の  
 不動堂



正亭の燈寺の丹楓



庭中楓樹寂  
母わくく  
晩秋の紅錦  
海晏寺の園林  
ももある色あ  
實よ一時の  
奇観  
15



軒近く立ちまわると宿とひき待て夜はあひよとまきけ

梅花無盡藏云 木戸公号罷釣翁保和歌之正脉  
余在洛而葦殿聲譽久之矣今也共寓武野之佳  
境隅田之上流往還無虛月豈非天之至幸乎昨  
賜詠歌三篇可謂暗投也聊奉攀未篇之韵脚云  
二月十六日 文明二十七年己丑  
雪月寧非老年伴 一吟聊答數篇韵  
隅田春色浪花 鳥若知都我細問

按孝範家之事武野國書場といふ所に入居りて其の序は武野の  
可く後云々と云ふ又梅花を以て其の詩の序は武野を罷釣翁と号し其の武野の  
佳境隅田の上流は寓居するといふ命を考ふは其の三竹嶋の地所その跡跡といふ

本戸孝範の從五位下は叙し前二竹守と云ふ又罷釣翁と号す今川  
了俊の一族より一々田道灌東常縁及び正徹宗祇公致万里杯  
と同時世の人なり鎌倉大草紙は孝範の冷泉中納言持乃御の  
門弟より一々空双の哥人なりとあり同書は長祿元年東の乱り  
於て京都將軍家の舎弟左馬頭政經東御軍の宣旨を奉り  
下向ありといふ条下は供奉の人の中は此孝範の名あり  
孝範は曾祖及  
貞範建武二年

藏人より尤近きものなりて其の美を其賞として昇殿とありさうり記でりす  
鎌倉大草紙は永徳二年氏備山義政退治の事發向とある条下は先代の太政大臣の中は本戸の  
範季と云ふを攀く同書は永徳二年憲基の旗手ありと後豆田を備ふこと討死の人の中  
本戸の盛備範といふ名を住りし竹嶋其氏族の人名なりといふ事考ふべし

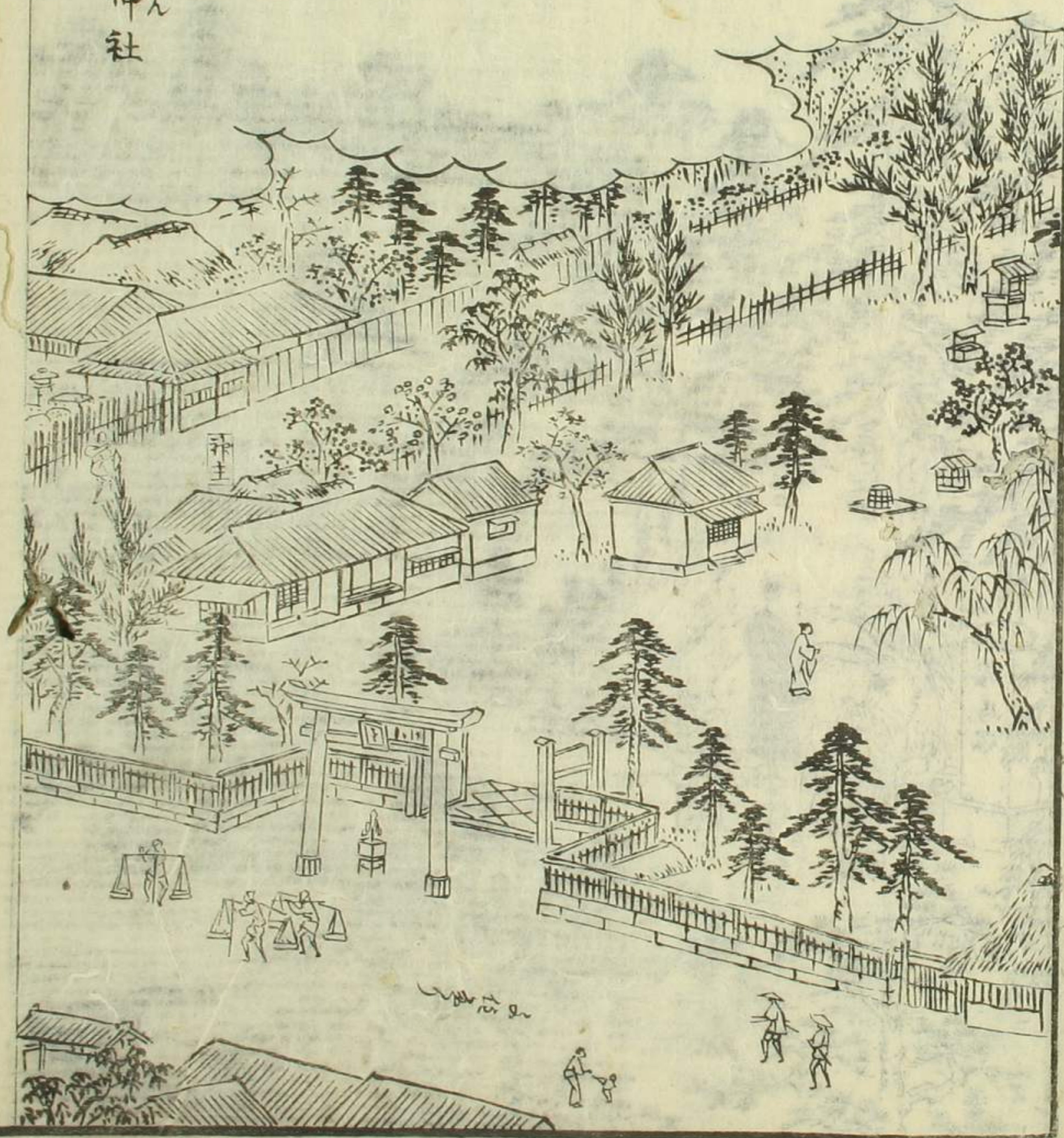
萬里居士寓居地 前記に云く萬里居士本戸孝範と其の隅田河の上流に寓居す  
ありと 萬里居士諱の端九初花洛の萬年寺に入大主和尙は從ふて其法

を受く禅機文材ありと名譽四方は揚る應仁の乱を避ては尤濃尾の  
間萬と後浮屠の業を廢し自際補居士と号し又一は梅花無盡藏  
と稱し文明の末東武に遊る方田道灌養遇甚渥一確殺して後濃  
小歸王老を扱と曾て天下白二十五卷を著と文明中東遊の詩文集  
あり梅花無盡藏と号す

藝田明神社 新鳥越にあり祭る所日本武尊一坐あり當社の往古え  
鳥越の地あり一り正保年中今の所より移しり例祭は隔年六月十日  
執行す

駿馬塚 同所南例竹某り別荘の中より傳云康平中原義家東征

山見  
熱谷  
田明  
神社

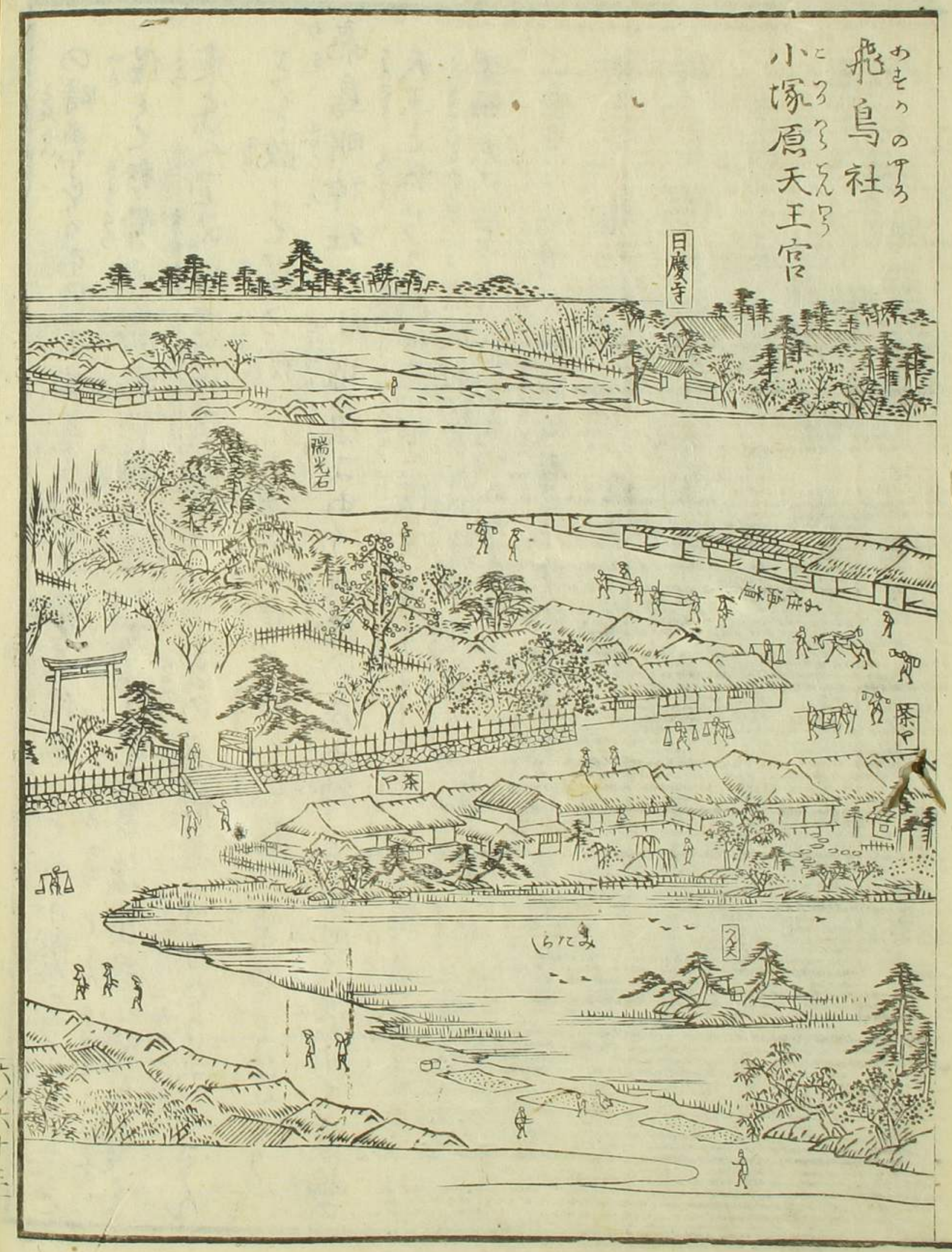
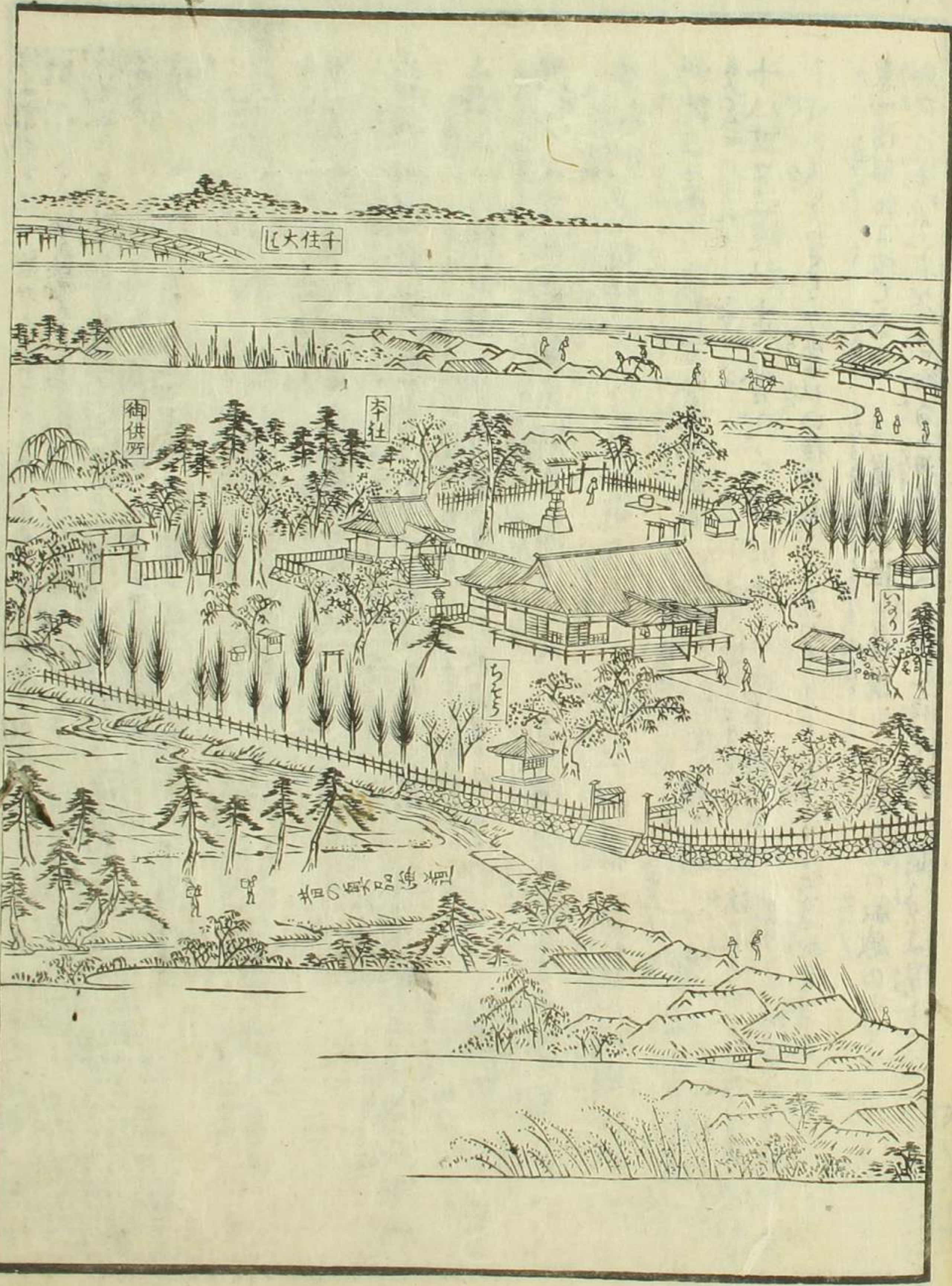


駿馬塚



の時色よりの石の青海原とりの強愛偶病一ころ小覽を公大よ思を  
 傷とて朽骨を釋路の傍に埋めめめとと其後里民小祠を愛と  
 建とて又近き頃其地のあり公の明德を子歳の下に顯さん  
 工を故して塚の側は石碑を建て祠に其塚の東の方を迂り  
 飛鳥明神社 小塚原あり此地の産土神とて世人混して兼輪の  
 天王と称せり列坐の聖護院宮ありて前石山神祇寺と号す  
 祭神大己貴命 日本紀古事記遺事大己貴命の御子なりとあり 事代主命 古事記事代主命の御子なりとあり  
 二坐り社傳曰往右延暦年中比叡の黒丸師東國化度の此地より  
 至る小小條の茂王なる一堆の小塚あり 此塚より此地を小塚原と号せり 其塚より夜に  
 瑞光を現し白衣を着たる二人の黒判棘生たる石の上は降臨あり  
 と黒丸師より曰く我の素盞鳴命の和龜大己貴命なりと 此社牛頭  
 又一人の黒羽曰く我の事代主命なりと 此を飛鳥 云々仍て忍致謁  
 仰し清浄の地を撰むて此神一社を奉す 牛頭天王の毎六二月二日なり  
 日九日すて住大橋の南侍





のまりのつろ  
飛鳥社  
こるるえん号  
小塚原天王宮

佛の靈を護りて後... 一基流れ... 又後... 細... 二... 然り

豊徳山誓願寺 惠心院と号を飛鳥明神の北にあり浄土宗より

奉多は阿弥陀如来を安んずる基に惠心僧都あり

寺傳曰僧都顯密の二教を究め於諸宗を渡り遂に弥陀の祈願

に帰入し往生要集等を著して大に自化を化せり

僧都上豆の慶祐法師と諱りて曰く念佛の教いし東國は道化

を汝行く弘法もへりとなり仍慶祐法師命を受東國は道化

此比は未り當寺を建立せし 中右頼破を増上せり

十八世了蓮社定誓上人隨彼大和尚中真也り

一戒の文をりてり字仏の後の教もりなりと云ひ傳るまうらふ記を其文に云

惠心僧都勅に依て泰内一稱讚淨土經を侍講申されり威感のあり奉多をよみ

御衣を賜りてり右御衣を母の方へ御衣を授られり返りて是を榮とて

おれくましく恨られし其文云

嗚呼... 要集... 鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集...

鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集...

鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集...

鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集...

鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集...

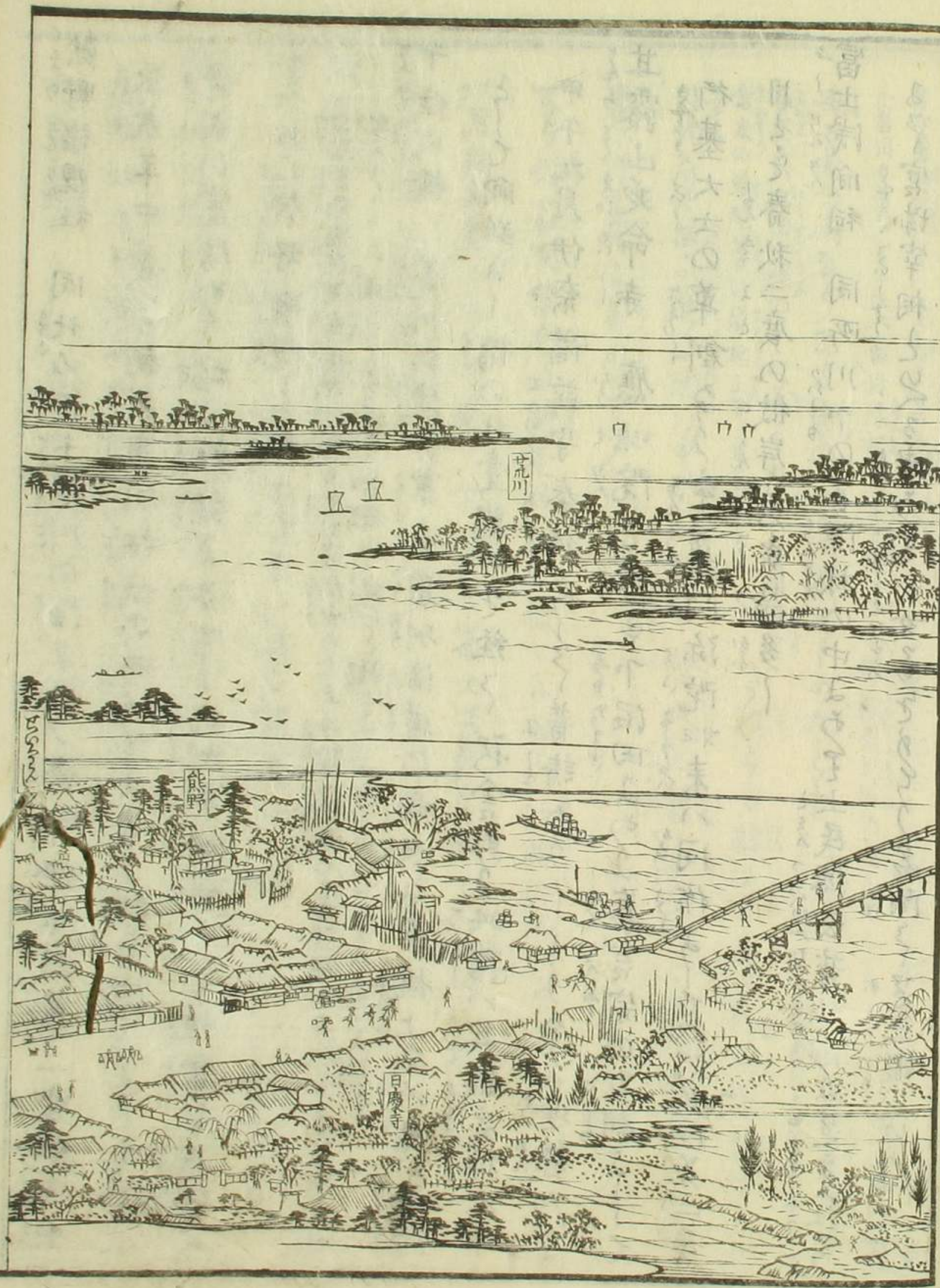
鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集...

鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集...

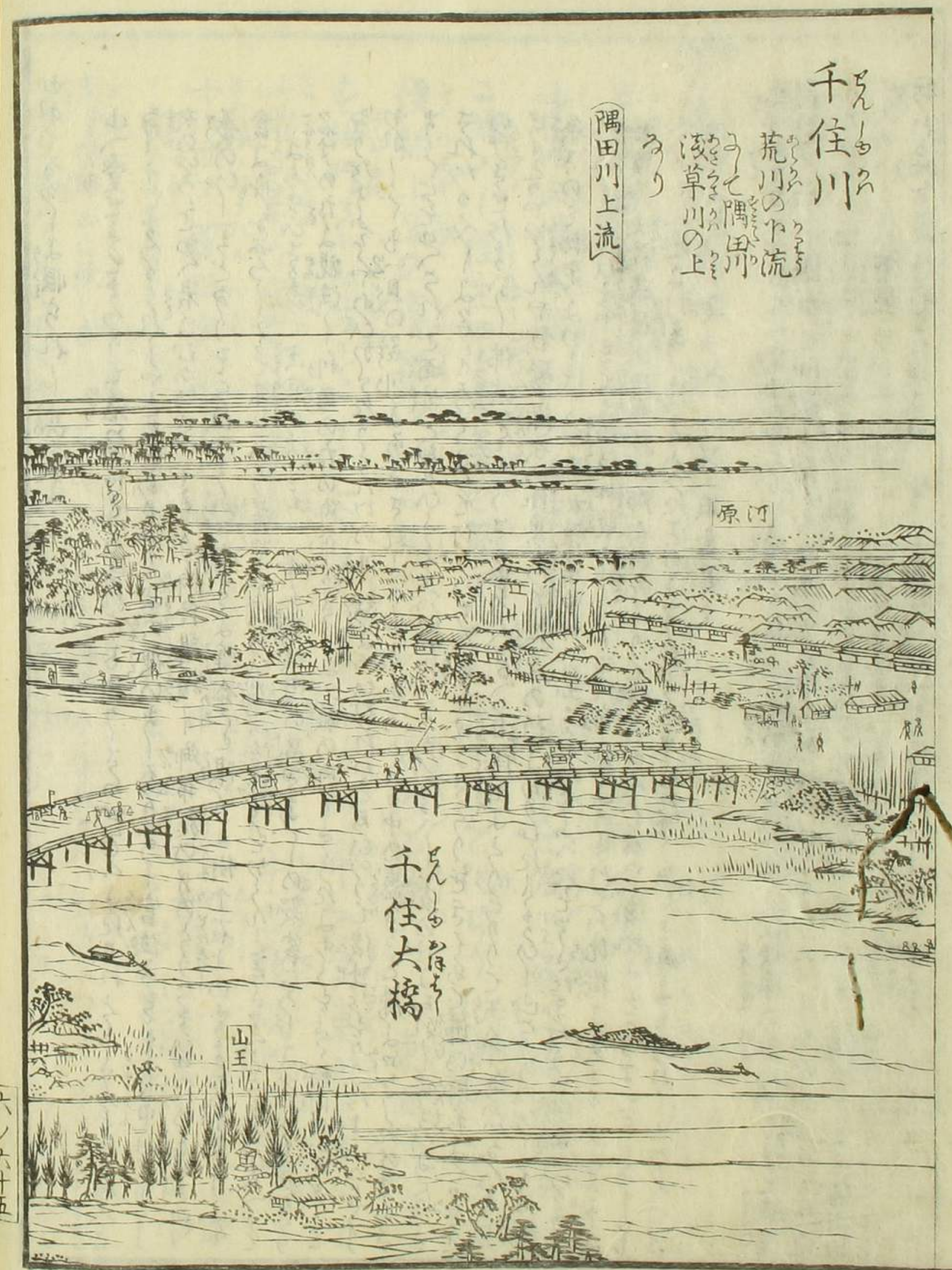
鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集...

鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集...

鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集... 鳴呼... 要集...



富士別山崎 同西川  
 川より春味二春の  
 基大士の草  
 且霧山文命



千住川  
 荒川の作流  
 隅田川  
 浅草川の上  
 隅田川上流

千住大橋

山王

原河

熊野権現社 同北の方千住川の端より祭神伊弉册尊一坐社傳云

永承年中義家朝臣奥州征伐の時此地より河を渡りんとす

奇異の靈階あり故に鐘櫃に安じ 紀州熊野権現の神幣を此地に

とてめて熊野権現と稱してまつるなり

千住大橋 荒川の流に架き奥州海道の咽喉あり 橋上の人馬ハ絡繹

とて間断あり 橋の北壹貳町を經る 沢舎あり此橋ハ其始文禄二年

甲午九月伊奈備前守奉行とて普請あり 今又連綿たり

甘露山延命寺 應味院と号し下沼田にあり 真言宗の右刹よりて

行基大士の草創あり 奉尊阿弥陀如來ハ同作りて六門弥陀并二番

月とて春秋二度の彼岸より祭請多し

富士浅間祠 同所川下の方深林の中より土民傳云昔此地より足立莊司

より宮城宰相といへる者あり一女子をとり名附て足立姫といふ

才四番西縁起 三番同五番同とて六番月縁起より足立姫の事あり

嶋七郎の村あり 者ありとて城を築き 六門弥陀并一番孤起より足立少輔の

縁起より沼田中捕の月より送るあり 三番月縁起 六門弥陀并一

外他より故に是より隨つて父母強き 誓詞を誓ふとて此より始り

患へり 竟に荒川に入りて死す 又沼田川より云々住川の 侍女も又より身を投て死

り 仍莊司悲歎し絶とて又村人彼女子等の行跡のたゞりてを稱し 其日

六月朔日のよりあれとて 其靈を富士浅間と稱して一社に奉すといふと志

ゆれとも其説未詳

浅間洲 同所の河洲をさうとありて是より足立姫溺死の所ありといふ

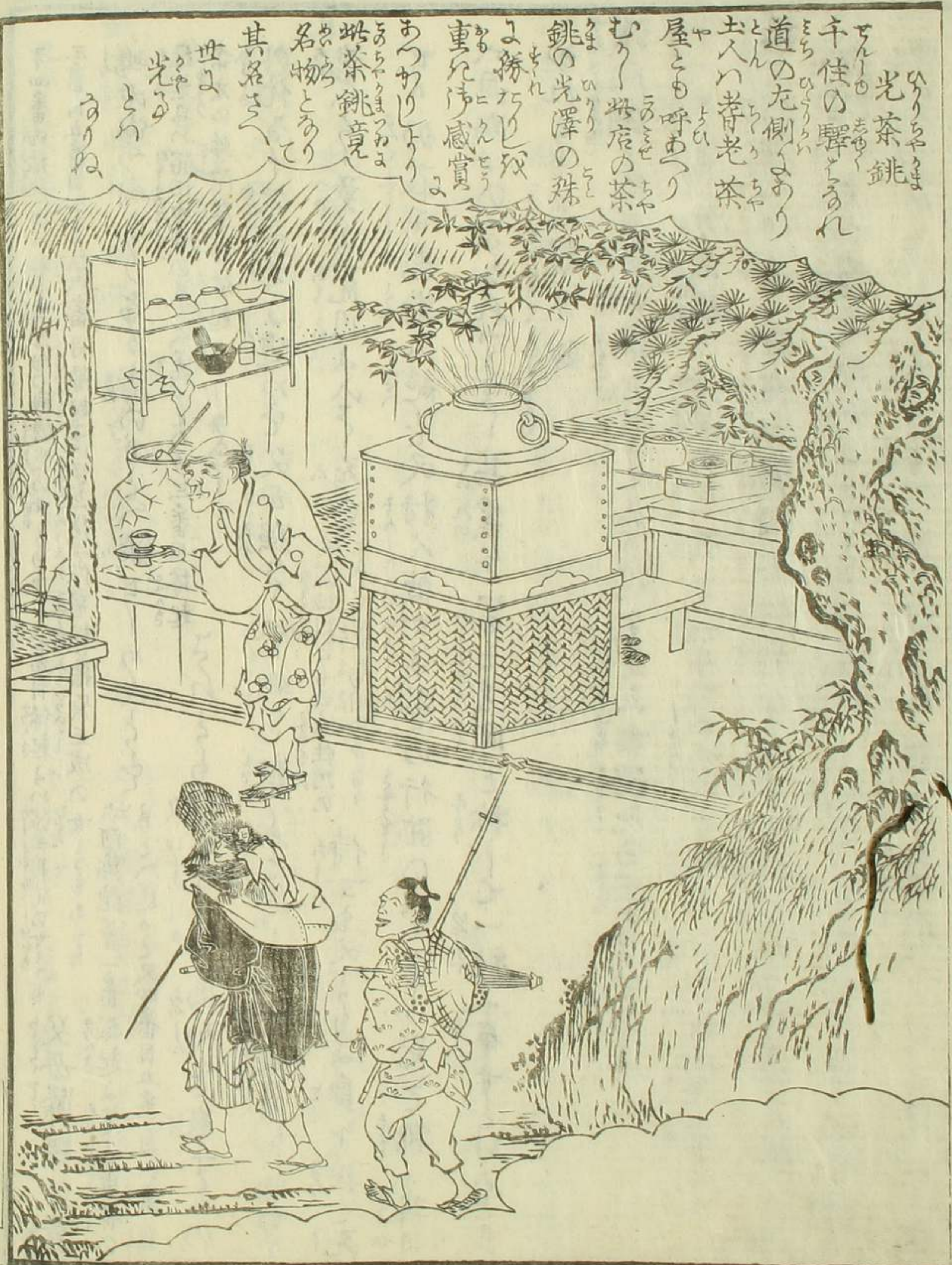
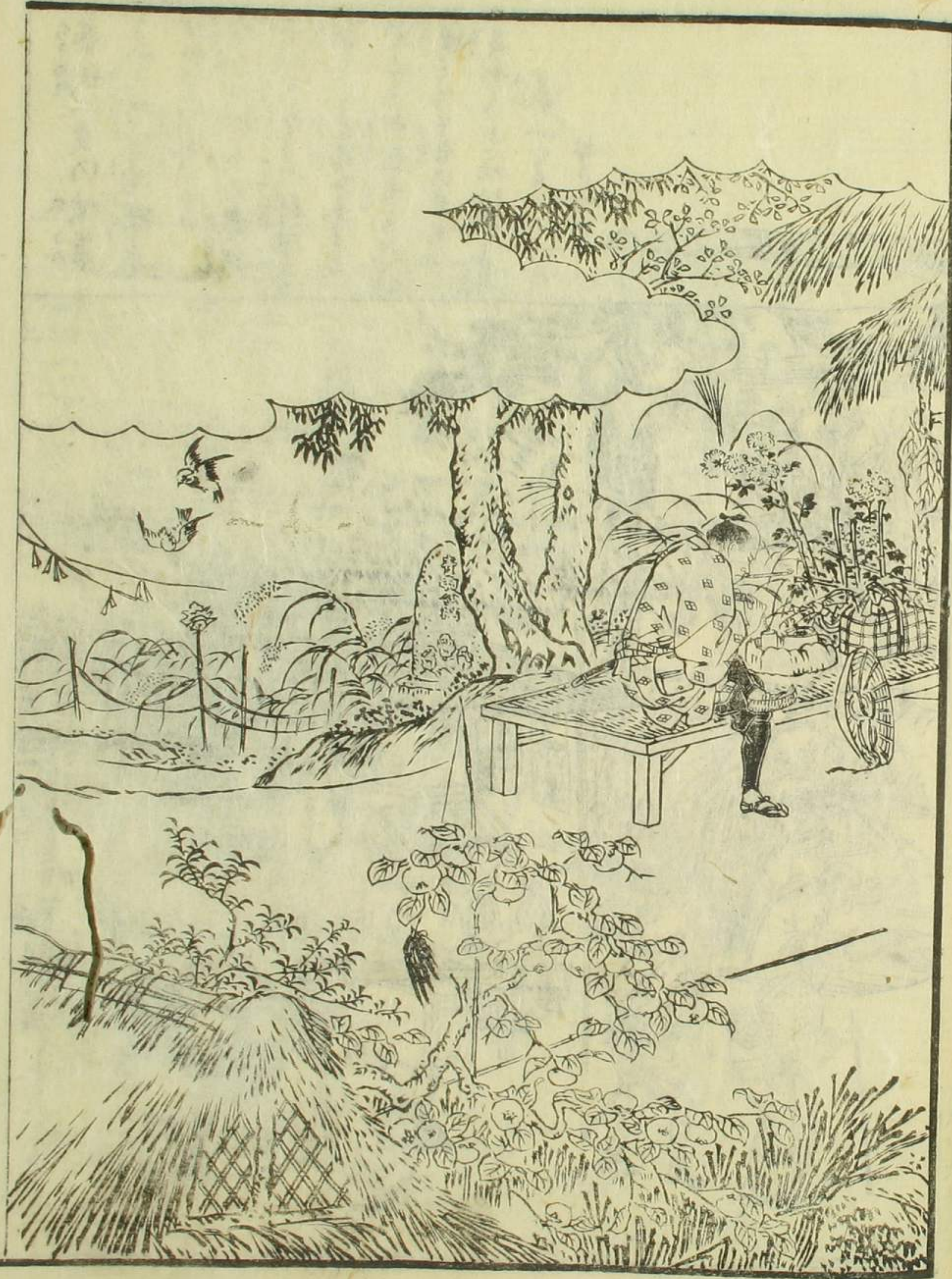
十二天衆 是より娘の侍女の死骸を収めて十二天と稱し 船方村の徳守あり

餘木阿弥陀如來 宮城村龍燈山性靜寺に安じ 往右行基大士六辨の刊

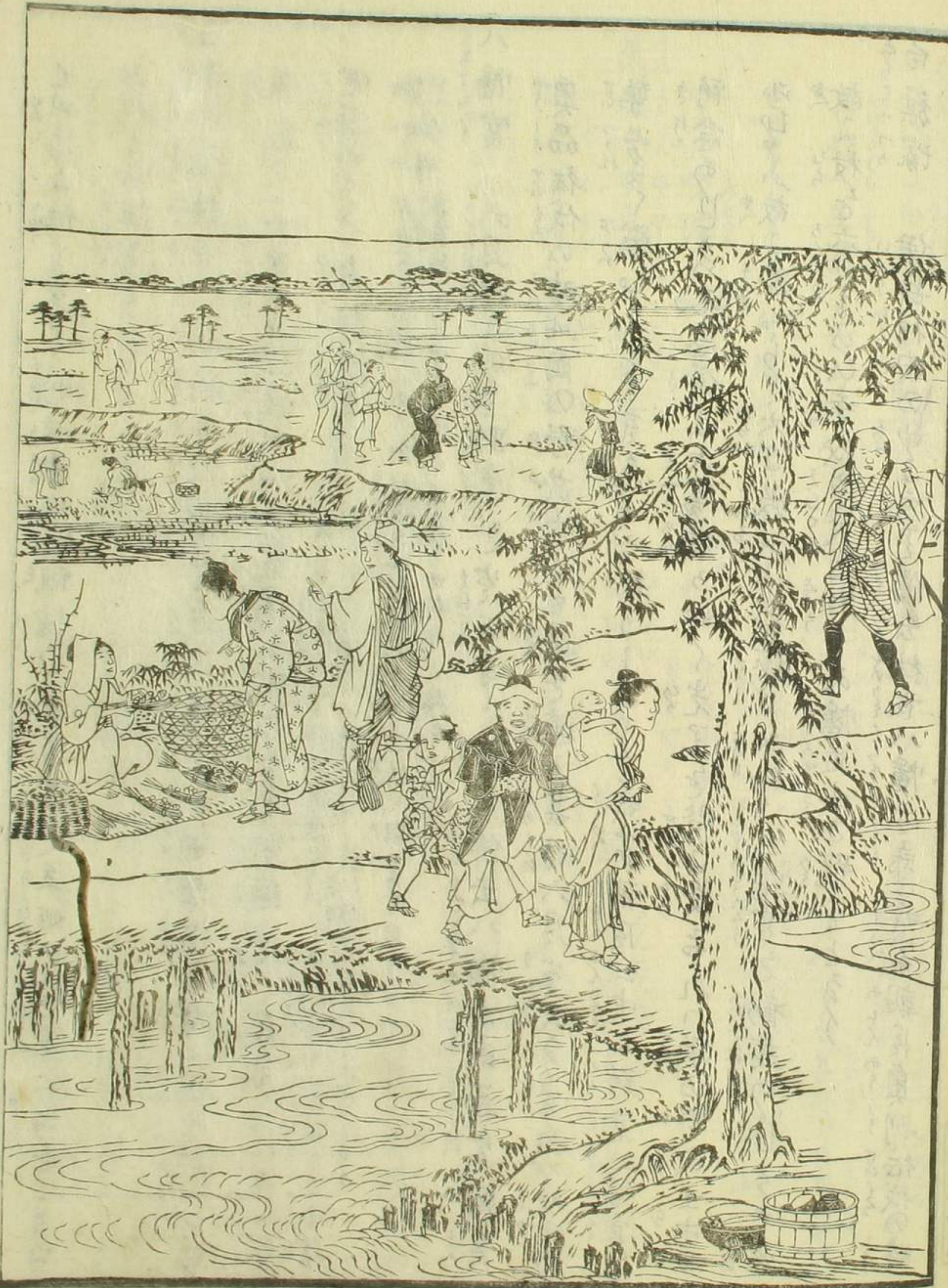
彌陀如來の像を彫刻ありてその餘材を以て是より造るにまじ草堂の

中より安置ありて遙に後明徳の頃正譽龍春和尚改て一字の梵刹とて

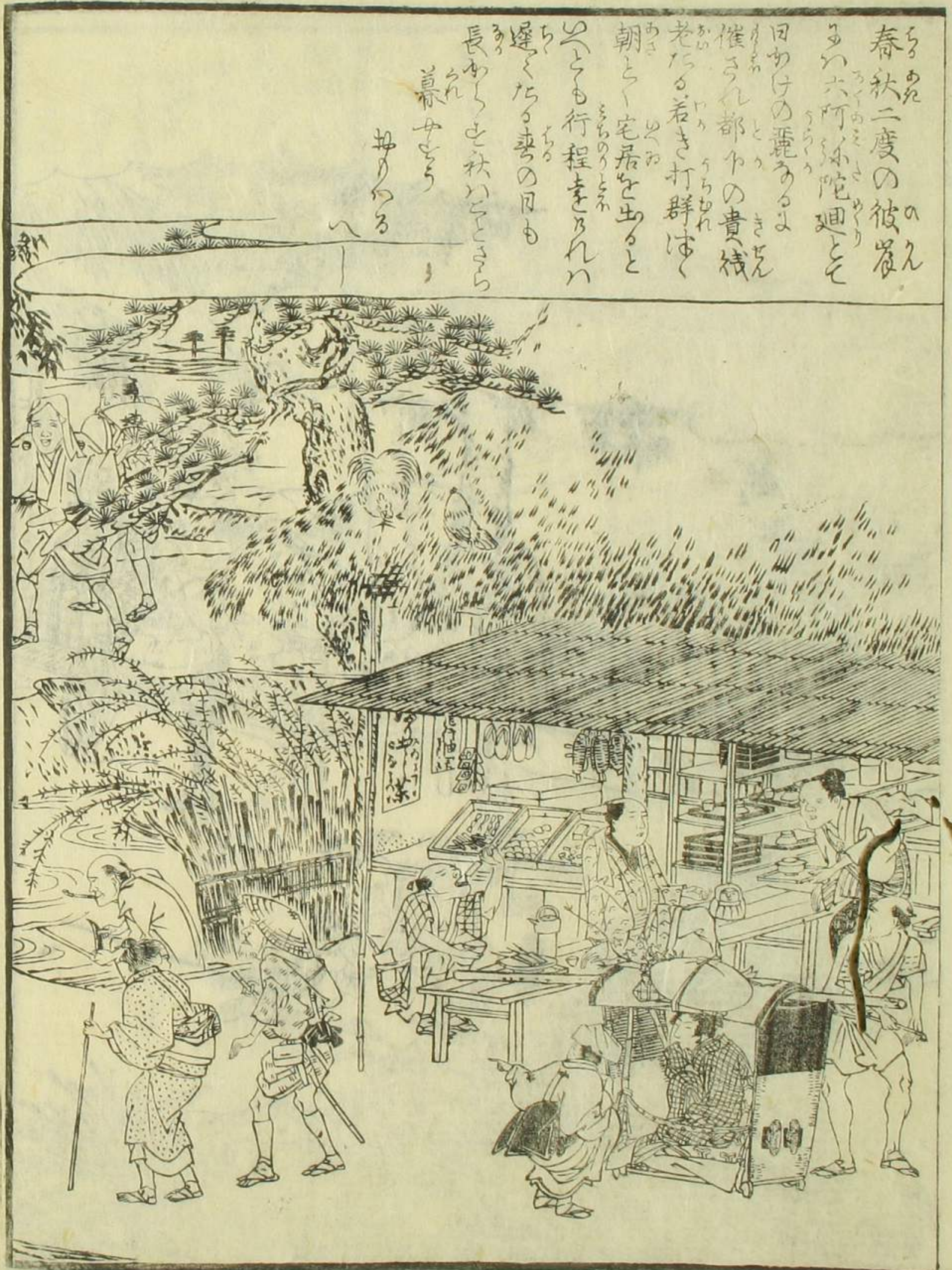
六ノ六十六



光茶銚  
 千住の驛とあれ  
 道の左側とあり  
 土人の昔老茶  
 屋とも呼あつり  
 むろ一茶店の茶  
 銚の光澤の殊  
 又勝たしと成  
 重んずる感賞  
 あつかりしより  
 此茶銚竟  
 名物とあり  
 其名さへ  
 世に  
 光る  
 ありぬ



春秋二度の彼屋  
 多六阿弥陀とそ  
 田あけの麗あるよ  
 催され都下の貴様  
 老たる若き打群はく  
 朝とく宅居を出ると  
 ひとも行程を及れぬ  
 遅くたる妻の目も  
 長あつと秋いとさら  
 暮せと  
 母の心



此地に住しつり則此寺の祀祖たる當寺又五姫の墳墓と稱するもの  
あれども詳ならずと

五智山總持寺 西新井村の真言宗より遍照院と号す弘法大師の

草創して奉る弘法大師の靈像も同作を靈驗著く毎月廿一日子を

開帳ありて糸詣頗多し或人云尚寺は弘法大師の靈像は其の北總真向山弘法寺に安置ありて日蓮宗に於て此像を尚寺に遷すなり

阿伽井 奉堂の傍にあり則弘法大師の加持水なり洗目服毒は用る

八幡宮 六月村の別當を空天寺と号す傳云八幡右郎義家朝臣

奥羽征伐の時此國の野武士とも道を速る其時六月空天より味方の

勢勇く戦ひしとる氣色も有りしより義家朝臣の中又鎌倉八幡宮を

祈念ありし不思儀は太陽繞り如く光りて背に交われ敵の野武士未日

小川の故に眼くらと大に敗北し依り此地は八幡宮を勧請ありしと此

故に村を六月といひ寺は空天と稱し又幡正山と號すともあり

白旗塚 伊奥村田の中にあを傳云姓右八幡右郎義家朝臣奥羽征伐の時

此地は白旗を建靴牙を留ししと此必ありしと近頃此塚上は小祠あり

其傍に立寄りのありし崇めし故社荒廢しをりりれとも其傍に再建も

せしと今塚ありを存す今此塚の上は此地の田面を白旗耕地と

り又燈塚と稱するもの五箇所あり燈首實檢あり後其

萬徳山明王院 梅林寺と号す梅田村あり新義の真言宗より奉尊

地尊菩薩を安と寺記云當院在基志左三郎先生義廣の八幡右郎義家

の孫六條判官為義の三男あり常陸國伊予に住し後同國志を村にあり 初武別

榎戸一院を創基し祈願所とす當院見る昔は是より先治承の頃頼朝初

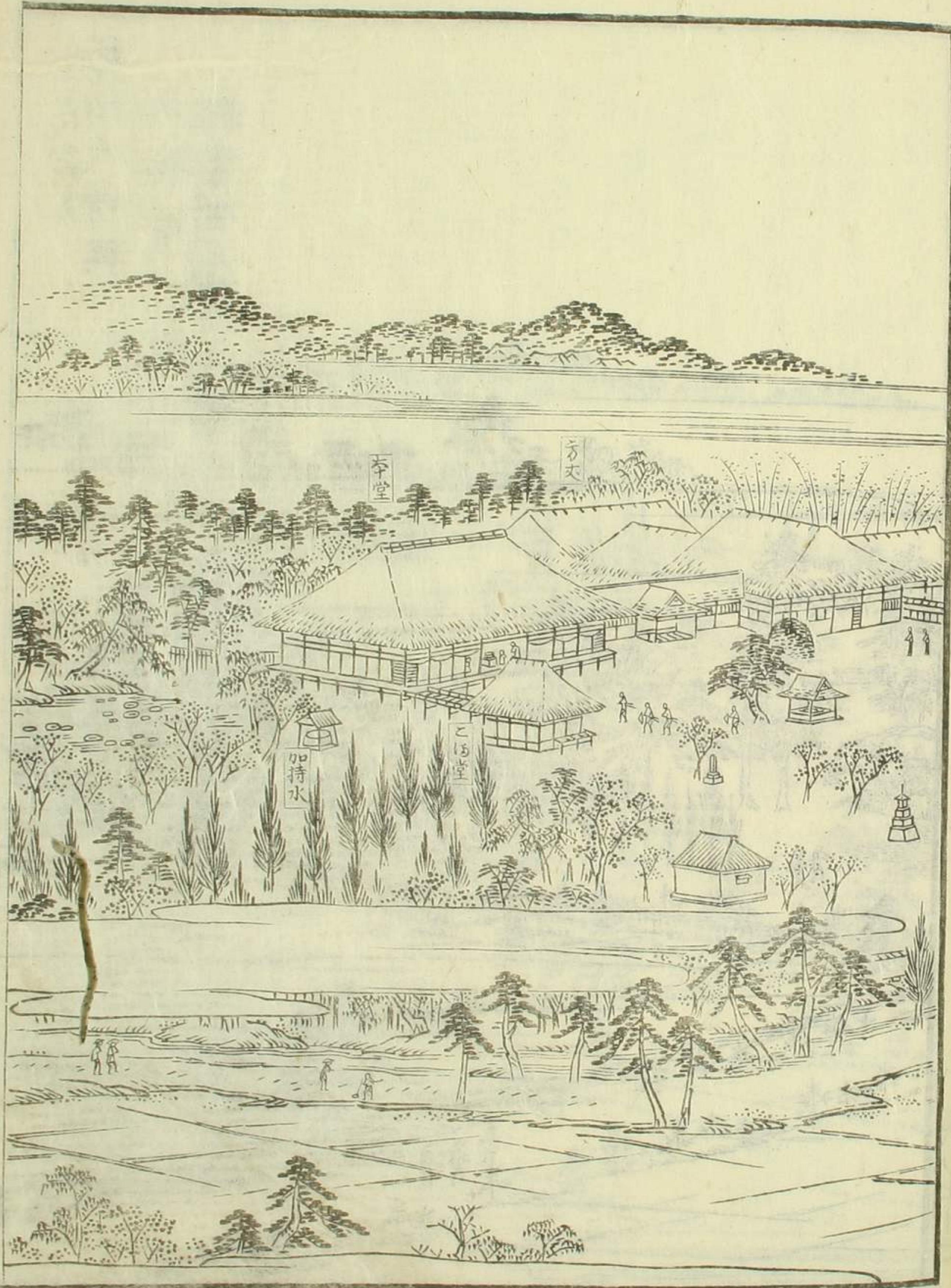
く義兵を起しその時義廣自主の志あり故に頼朝に隨つと初小山小四郎朝

政が為に敗らる其後同左馬女義純義廣二代 蟄居し此梅田村に住す今寺の

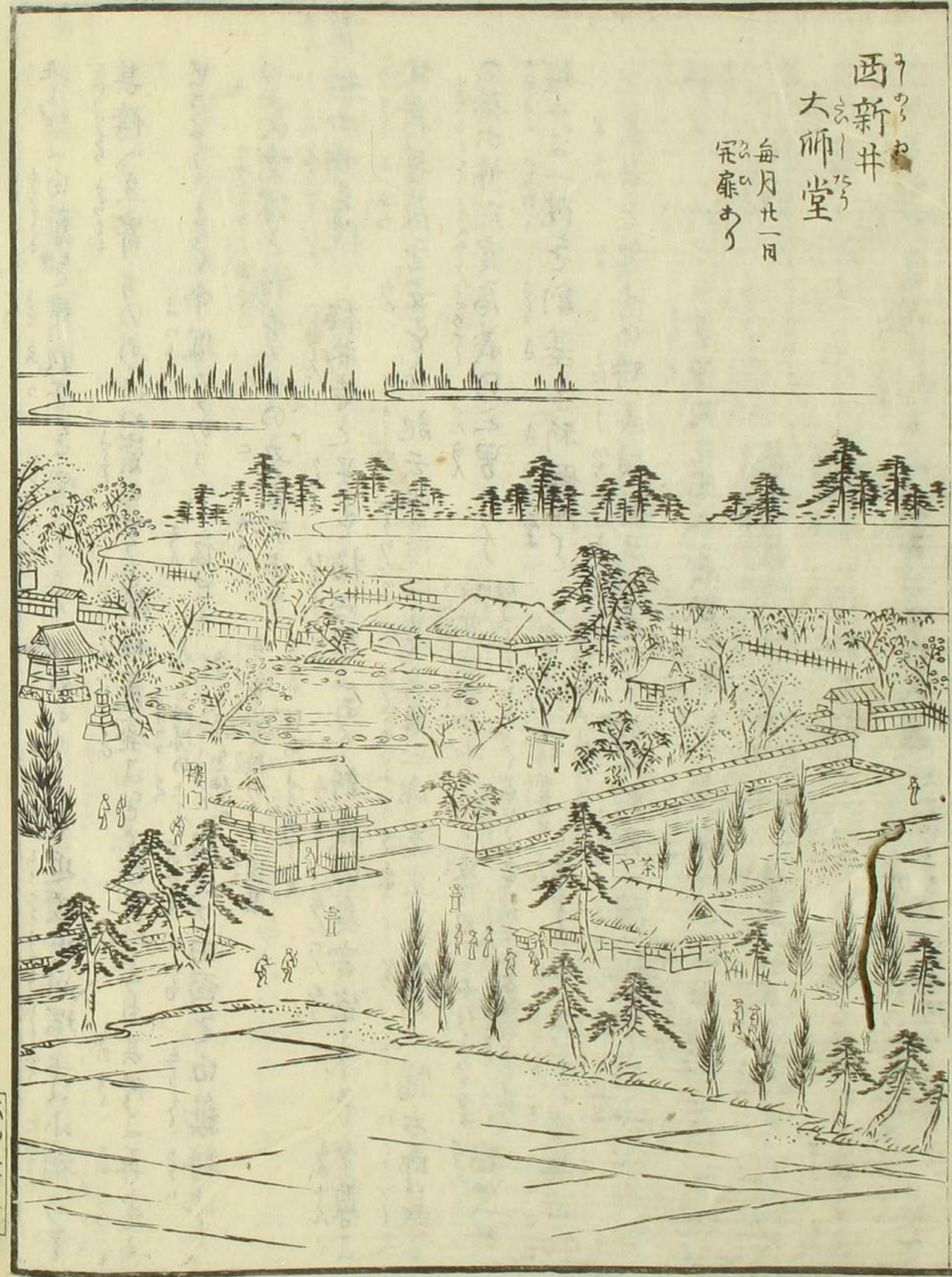
外右の方を奉りてはまはる住す其の孫なり 其裔常陸久廣義純より 當院の傍に始りて天満宮

を勧請し鎮守とす又神告し仍姓を梅田と改め小左郎と号すと又遠く後

永正年間東大に乱る同左郎左衛門久義小左郎久廣より十六代の孫同帶刀 是を



西新井 うら  
 大師堂 おほい  
 毎月廿一日  
 完麻 おひ



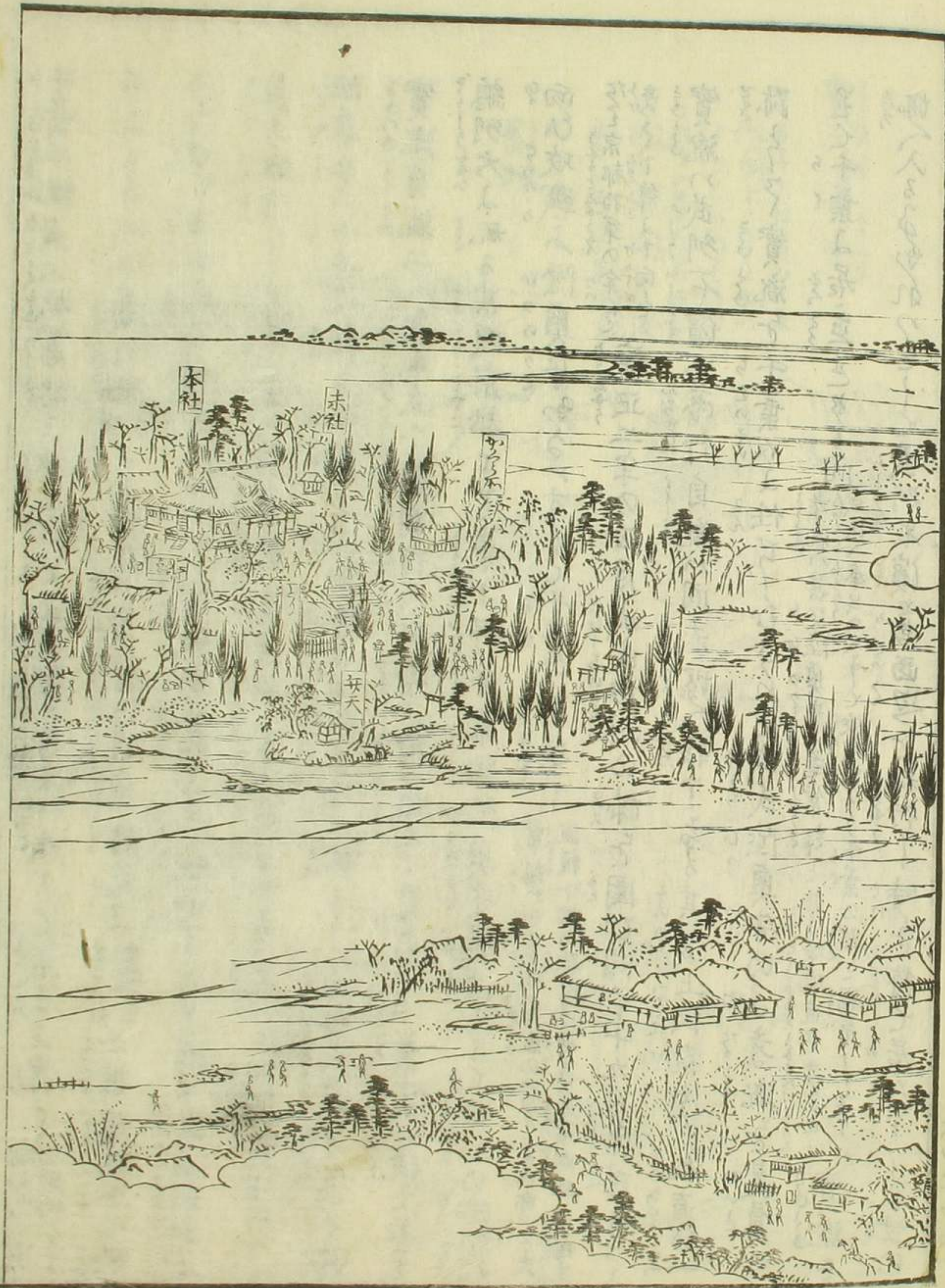




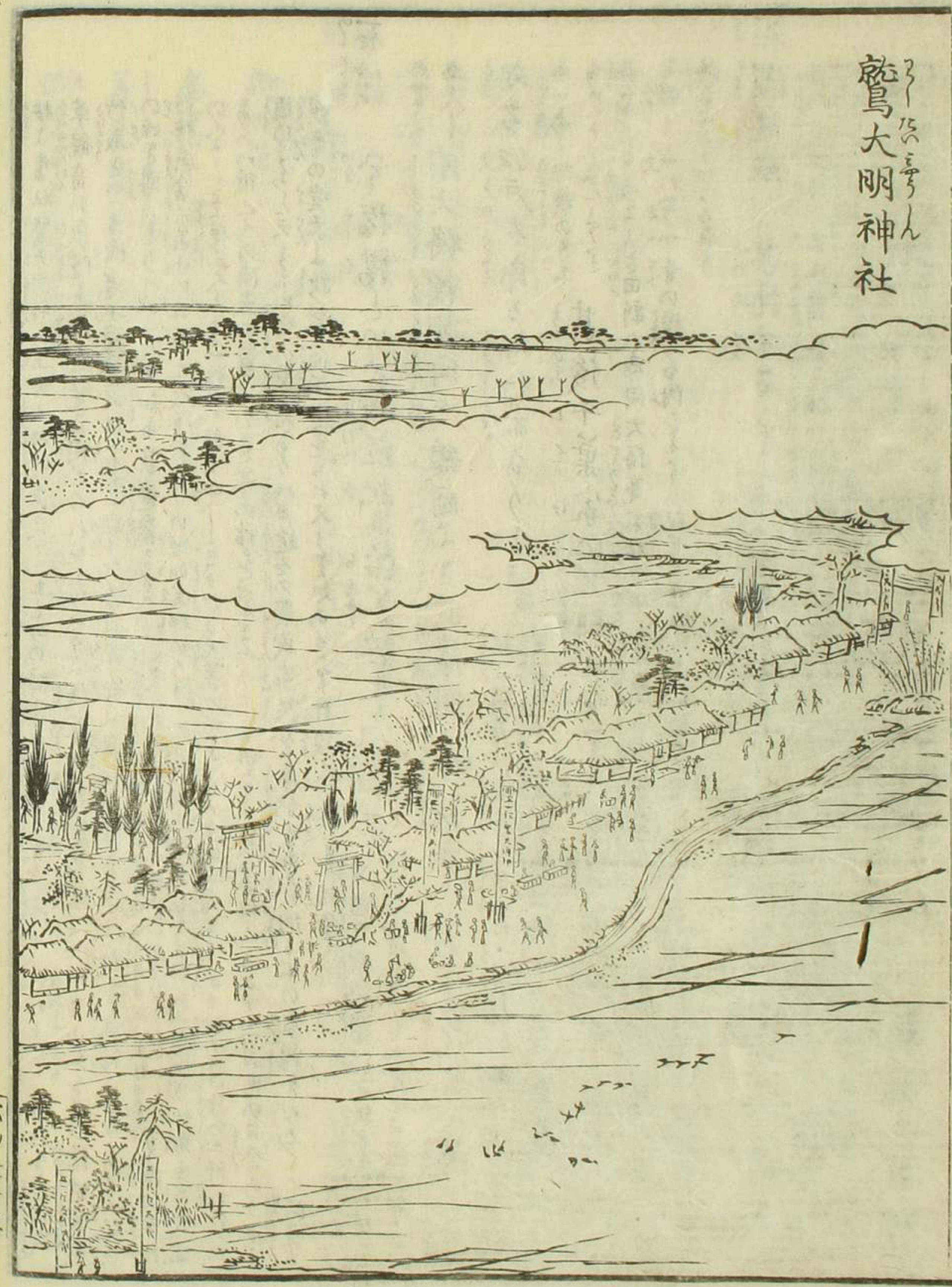
梅田天神祠  
 不動堂  
 別當明王院







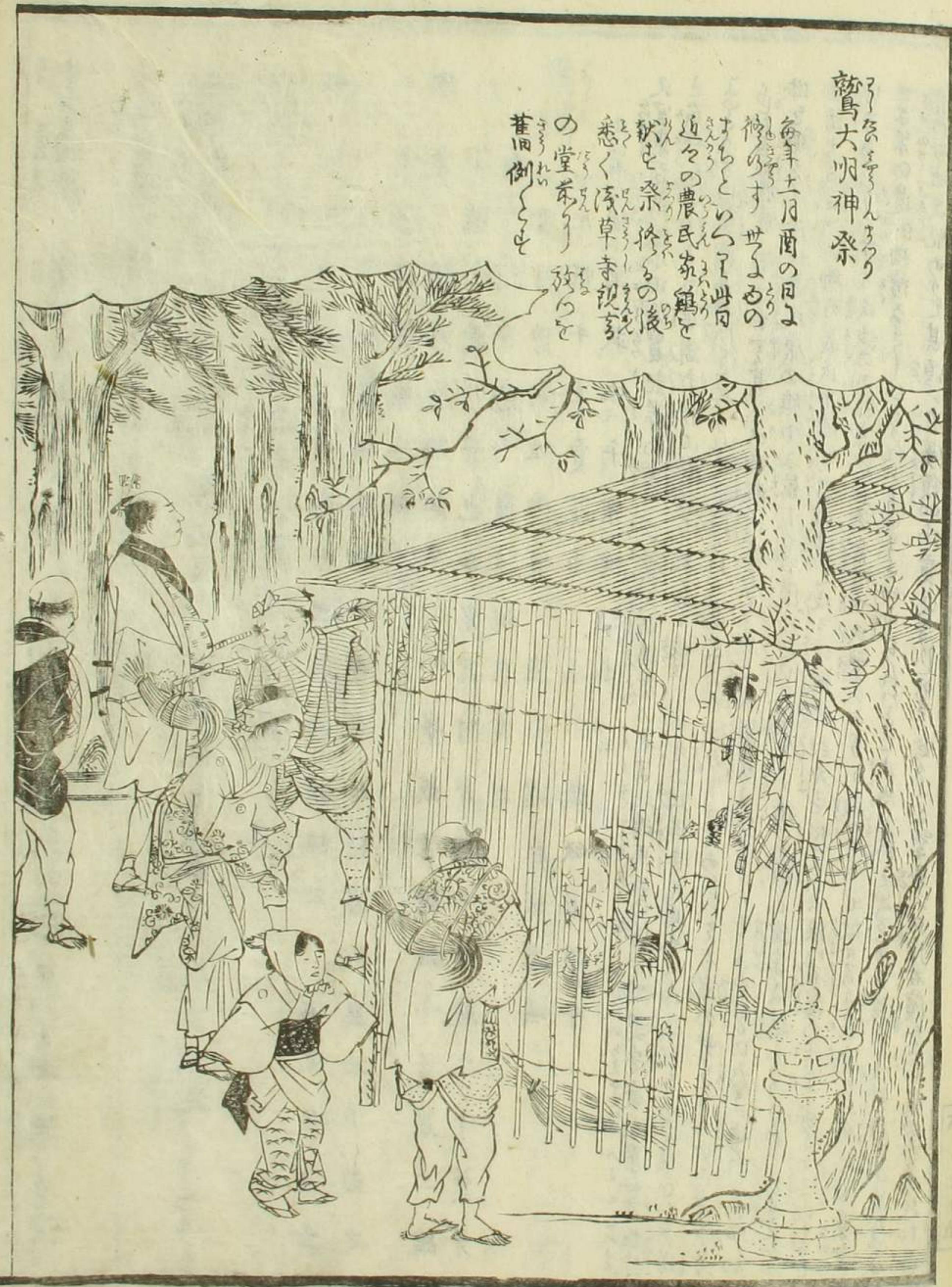
鷺大明神社



千葉胤胤直上杖憲忠と諒つれ又子胤胤共一味して成氏に背く  
 成氏は胤胤の  
 放千葉大助胤胤二男陸奥守入道常輝又子胤胤下總國馬加の  
 胤胤  
 より打て出成氏の味方となりて合戦を竟りて亨徳四年三月廿日胤胤直敗北  
 其子胤胤宜を以て千葉入道常輝舎才中勢入道了心等悉く切腹とす  
 陸奥守の千葉胤胤移り千葉の跡を継ぎ然るに上校よりの中勢入道了心の子息  
 實胤胤自胤胤二人を取立下總國市川の跡に楯籠らるを以て千葉家二流とれ  
 總列大に乱る其頃京都を東下野守常縁陸奥守退治とて馬加の胤胤  
 向ひ攻戦ふ陸奥守あはすして千葉胤胤引退く  
 常縁の千葉胤胤常胤の六男東六郎を夫  
 胤胤十世の孫なり時よ美濃國郡上の源主  
 康正二年の正月成氏市川の跡を圍む同く十九日落味  
 實胤胤の武列石濱へ落行自胤胤同赤塚へ移るる其後上校家より胤胤直の一  
 跡より實胤胤を千葉胤胤に任じむされと成氏陸奥守の子孝胤胤を長負あ  
 りて千葉胤胤居並むる間  
 孝胤胤其父陸奥守入道常輝と共放胤胤直胤胤を亡し  
 成氏奉公の人士と成成氏より千葉胤胤の跡を賜ふる  
 實胤胤之  
 城へ入るるゆれりとして武列石濱舊西辺を知行一時を待て居たりし世の

鷲大明神祭

毎年土月間の日は  
 修飾す世々の  
 近々の農民家無を  
 秋を祭終るの後  
 悉く浅草寺親宮  
 の堂前へ致して  
 舊例とす



中を述懐一濃列の宗居を依り上叔家より實胤の跡を兄の自胤小賜り子葉女

に任を是を武列の千葉と号す以上鎌倉大草紙の意を採る

南朝紀傳云丙子康正二年二月千葉の家も成氏と上叔と相論より

二よりいれ惟胤と園城寺の某武列と題く云

梅花無盡藏文明丙午隅田河詩註云隅田在武藏

下總西國之間路傍小塚有柳道灌公為攻下總之

千葉構長橋三條云

同書便面題詩註云八景或雪讀獻千葉蓋上總

下總千葉所管也今寓武列者與上下總之千葉牙

看一門分爲二灌公故在武者

雪月碧湖煙雨後漁歌鐘色送飛鴻

片帆千里賣花市上下總飯君握中

蓋祝寓武之千葉惟種也

又安東在戰錄小田原實記等の書に子葉大助備胤の成子北總馬加の侍主陸奥守康胤異母弟惟胤

と系譜をありては康胤打勝て總領を執ると依り宿老の曰侍主馬加の弟惟胤をいふは

よのうを田道能に庇陰を頼りて道灌に高家をして微力あるをあらはれ石濱の岩をとりて是を守

りし其後惟胤自身を其子に即胤利をうけ上叔朝貞に任りたりと南方の岩を返しては戸の

跡を退去し後北条氏康の旗に属し石濱近辺の所領を安捕し跡を胤宗に譲りたりと天正元年

癸酉十月右行の御所義氏下總安房の御を攻め頃胤宗討死に依り其後石濱の千葉は女子の

男子ありてはより氏改の下知りて北条常陸公氏繁の二男を継ぎて彼女子は書合に即胤村と名

せし葉の遺跡相續るるにあらはれしと切あられしと本内上所とある者上評討死の後其子

官内少輔支配ありて其頃石濱領四千貫ありしを其子に承継し其子の後石濱を返りし

六ノ七十五

橋場今神明宮の辺より南の方今戸を限り橋場と稱し舊名石濱

義経記に治承四年庚子九月十一日頼朝が井隅田の両河を

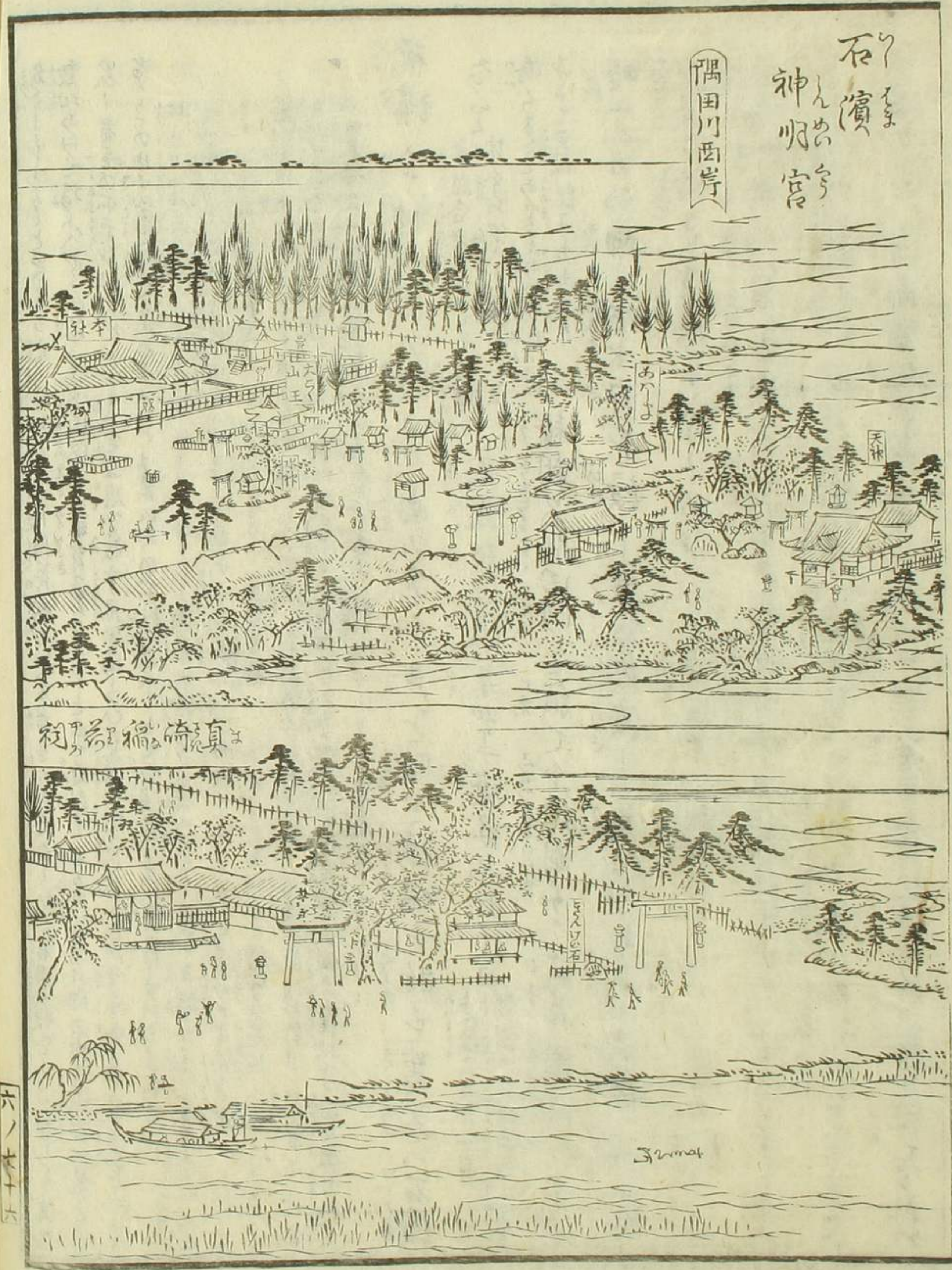
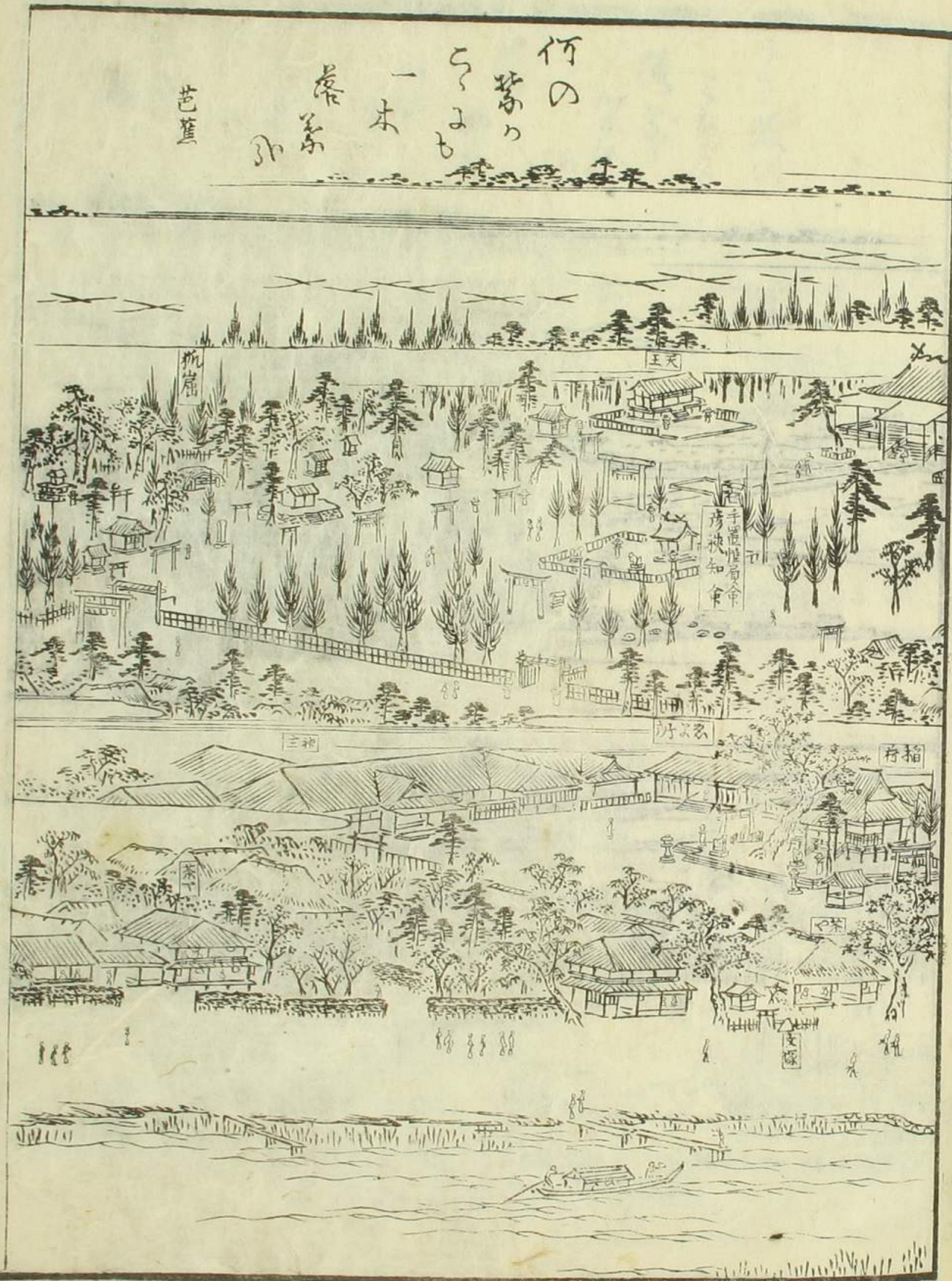
時二三日の雨は洪水岸を浸し軍勢攻渡し兼たりあれは武衛江戸を郎

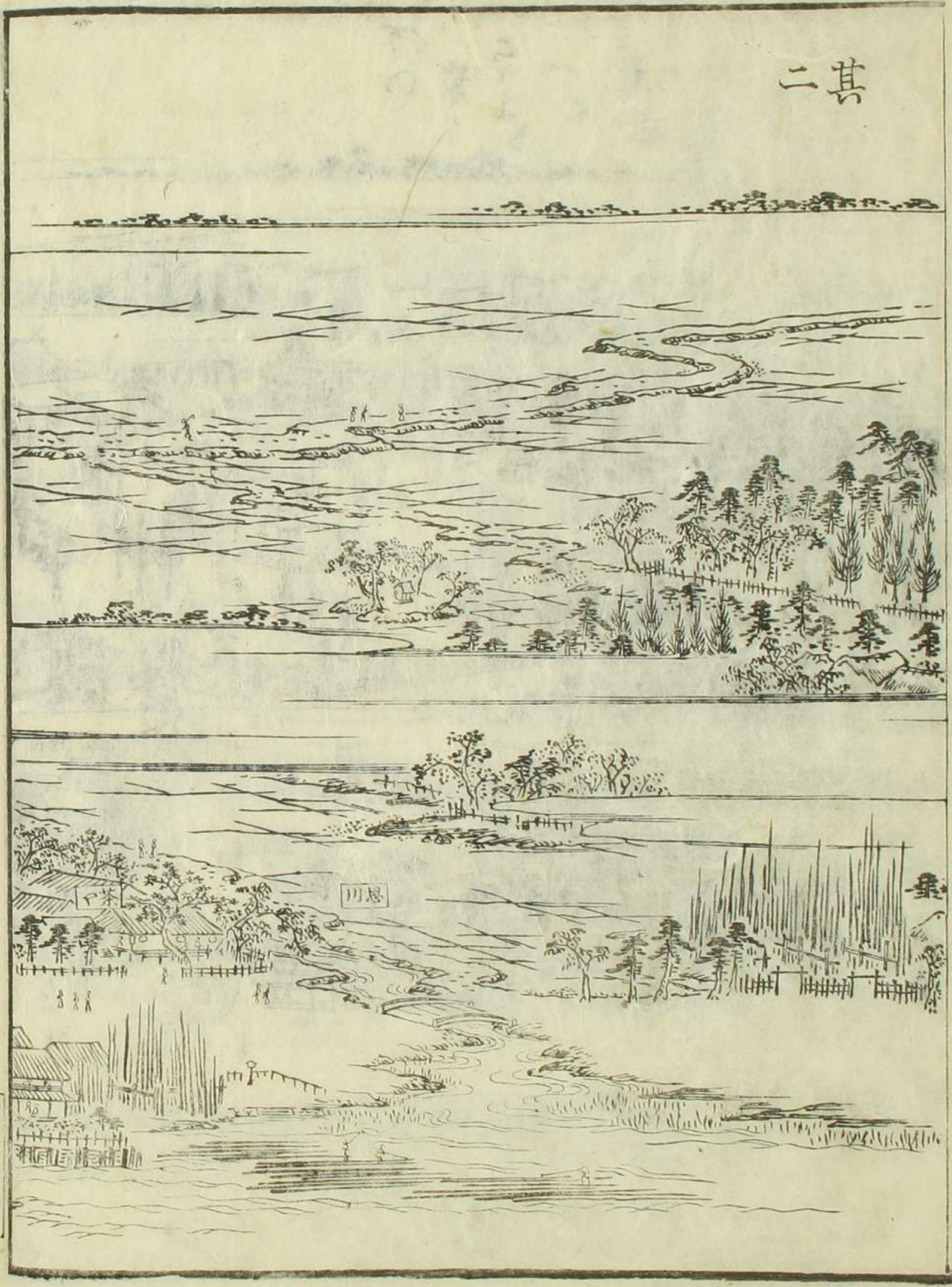
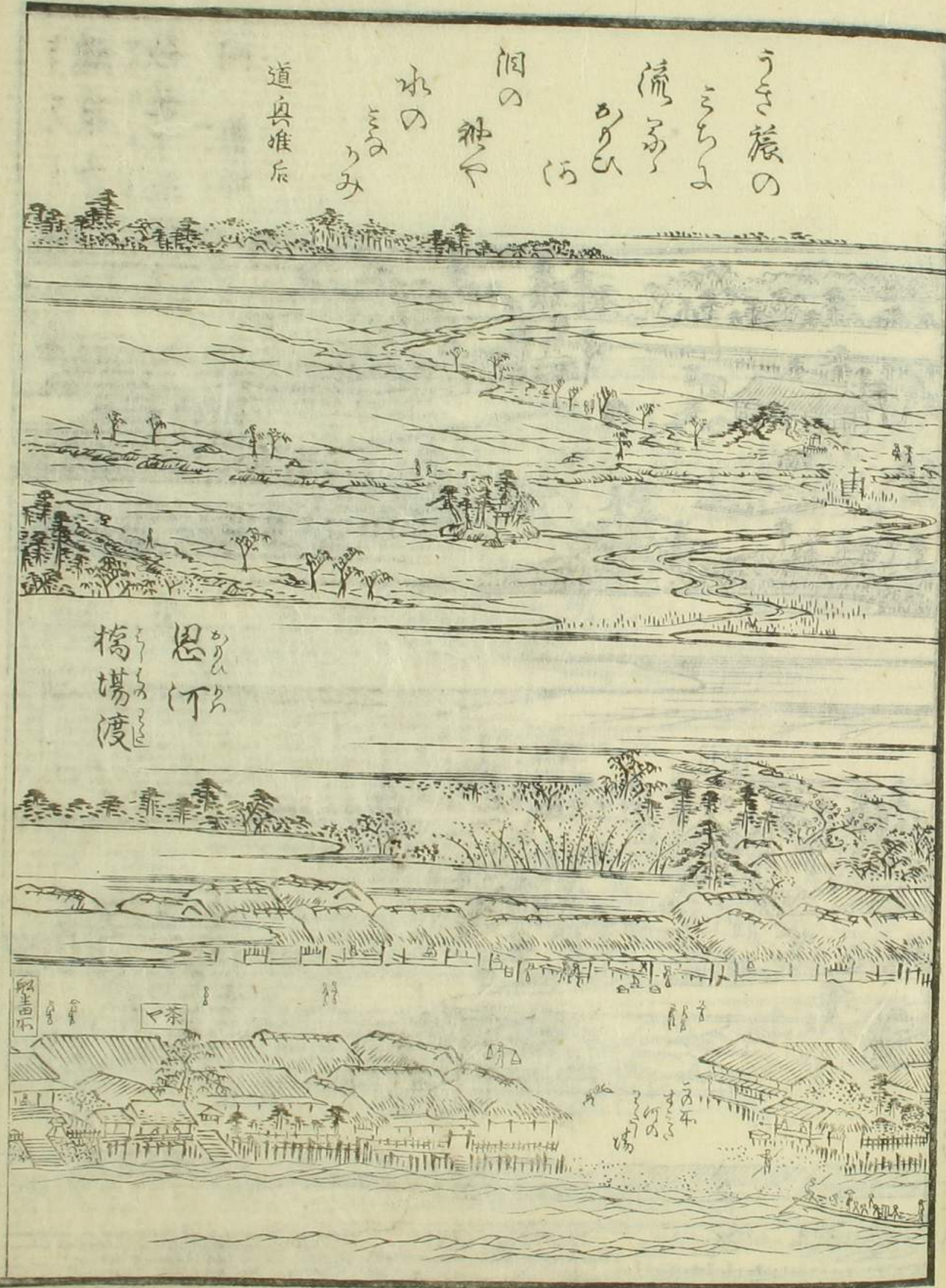
重長より仰り浮橋を保しめむと重長あへて諾むと依り子葉女常葛西

兵衛重清二人江戸を助むと知行所今井栗川おめりうりまうり

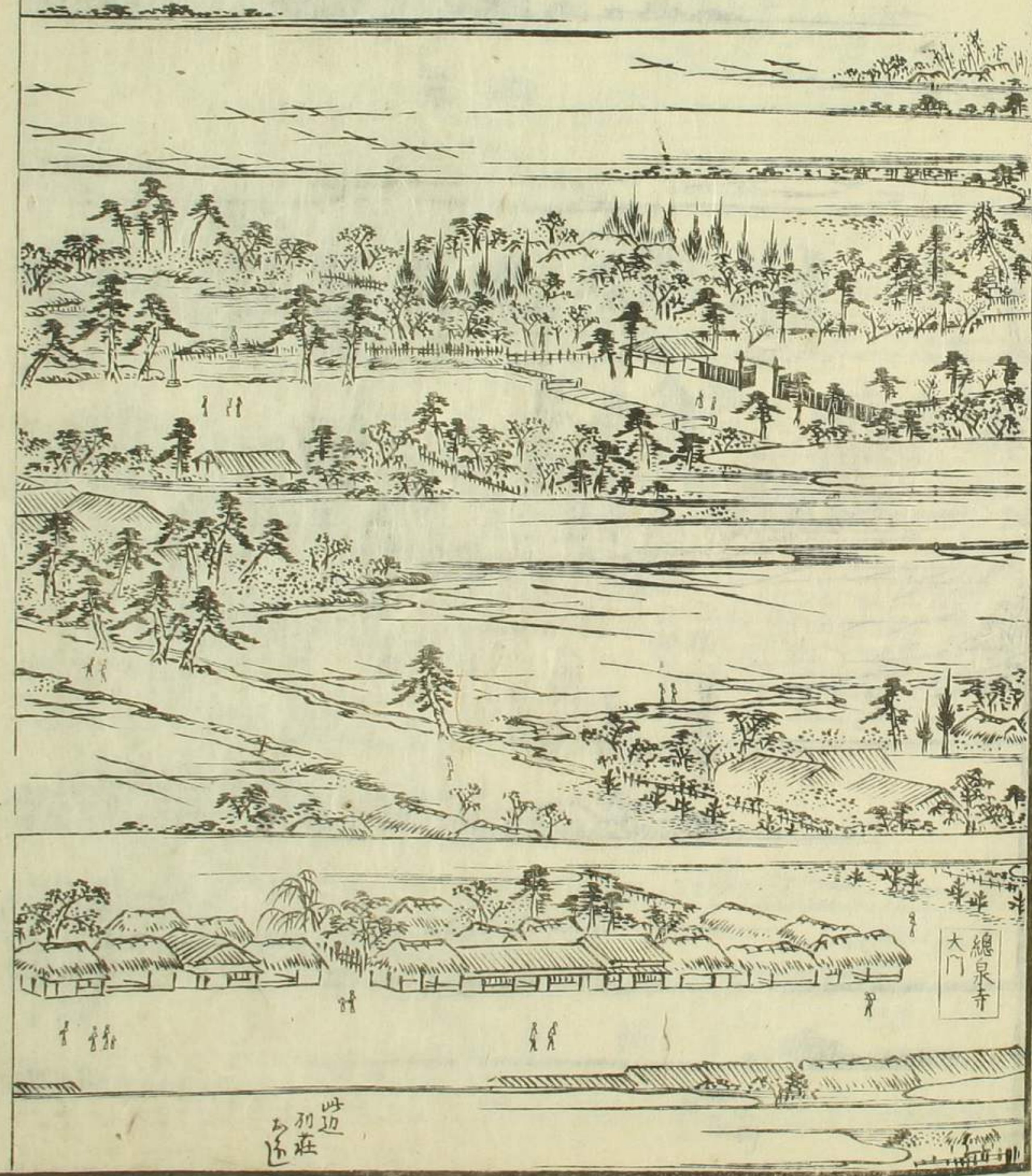
栗川おめりうり海人の釣糸を扱多登せ江戸を郎が知行所をりて

石濱の折節西國船の着たりと扱千艘集り二日の中お浮橋を起りし





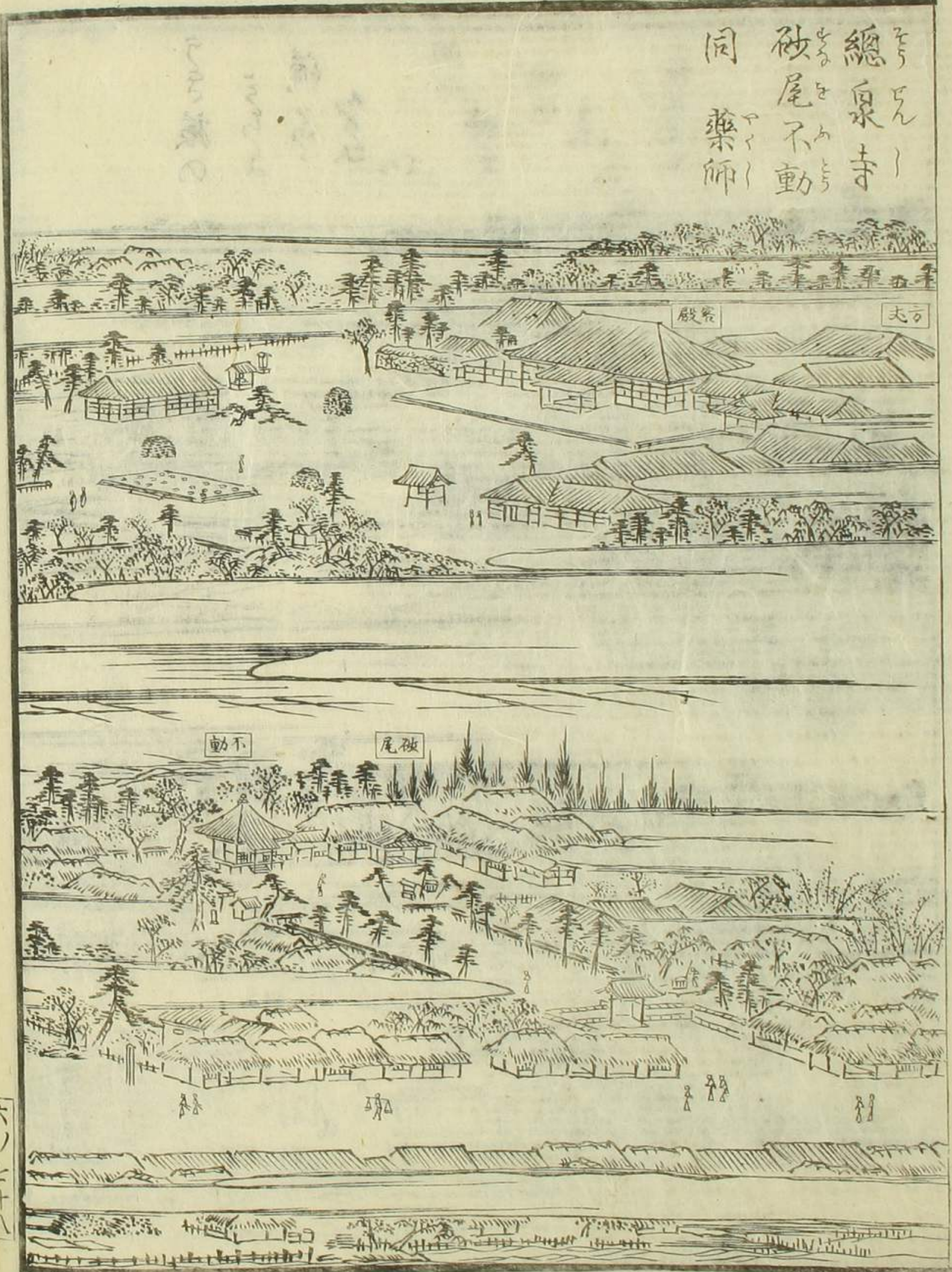
三其



總泉寺  
大門

此辺  
在

總泉寺  
不動  
尾  
藥師  
同



殿

大

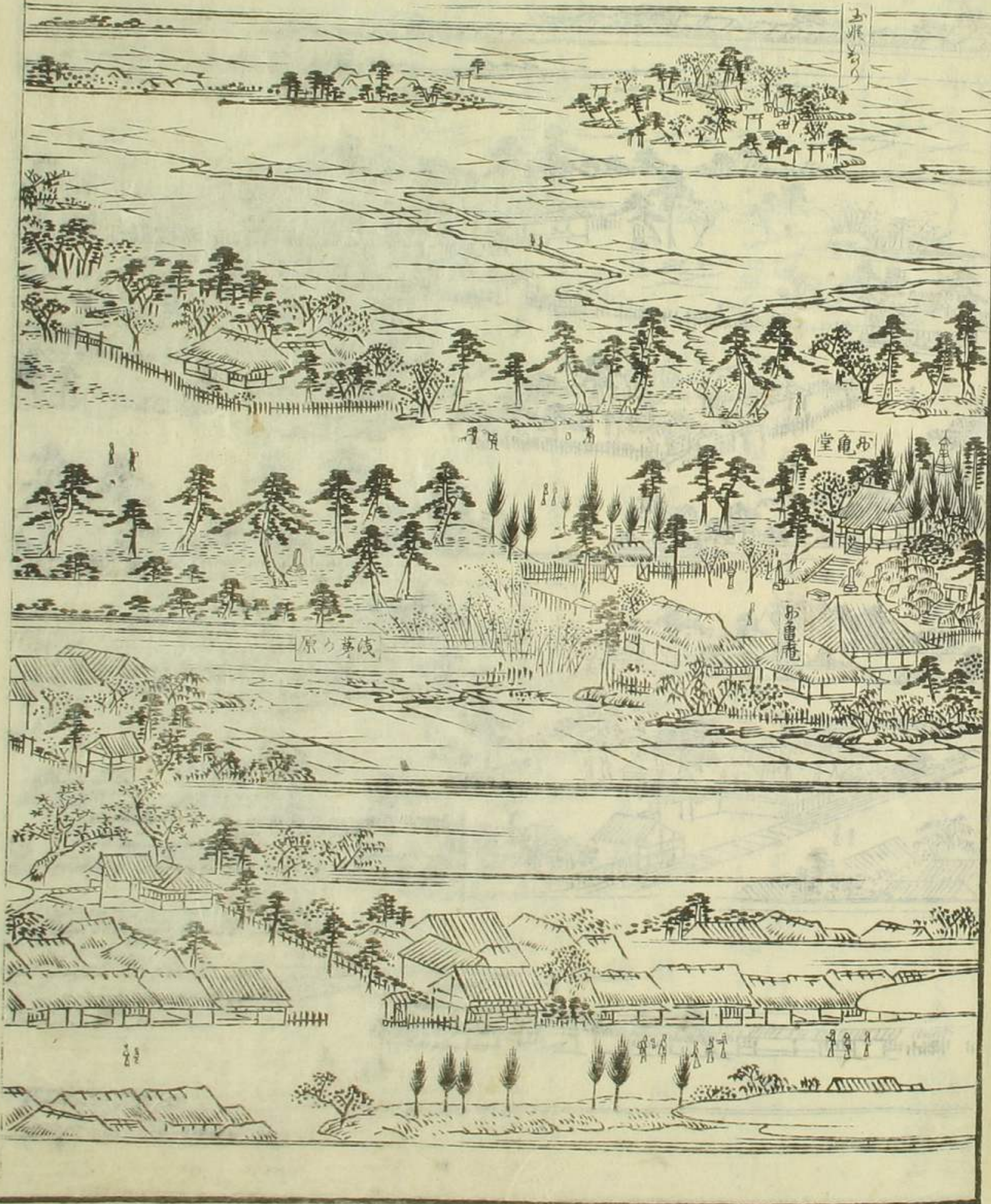
不動

尾

六ノ七八



沙菓の  
 原  
 わし  
 焼  
 の  
 の  
 其角



加龜の神社  
 浅茅の原  
 玉姫稲荷

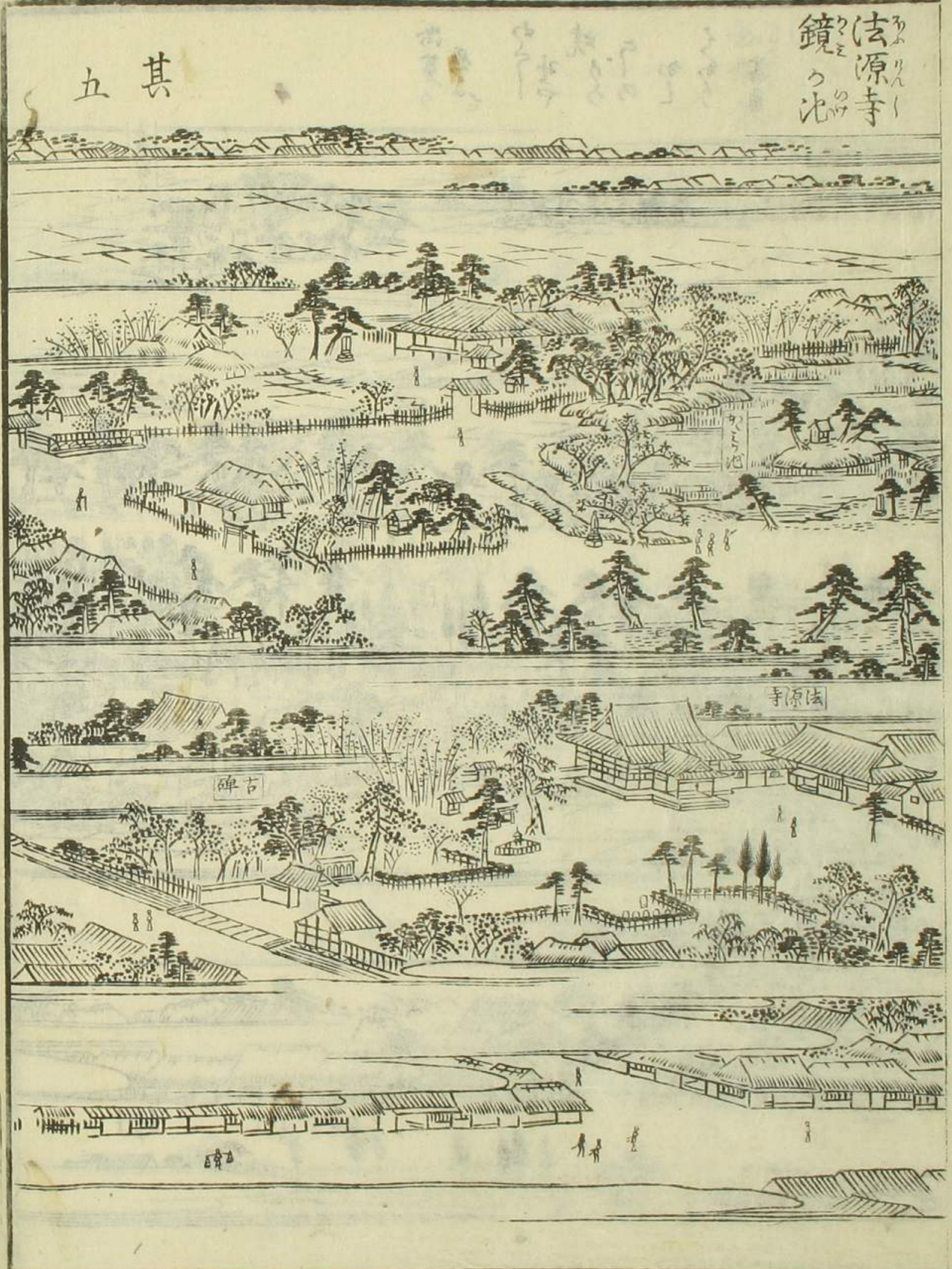
其四



人かこ  
 あれ  
 淋  
 夕  
 浅茅の  
 原の  
 霜を  
 道與准后

此  
 加  
 海

法源寺  
鏡つ池



其五

佐殿神母ありし仰られ本井隅田を打越て板橋より着あかたり  
隅田河

夫木抄  
隅田河にひかりまると今こそ身を浮橋のある世なりと云れ  
先俊  
其言はけり此言の康元元年鹿島社よりと云くは船田川の渡りてこれに被りて今も浮橋を  
ワケをせけれあり又

梅 花 無 盡 藏 詩 註 云 隅 田 在 武 藏 下 總 牛 葉 構 長 橋 三 余 云 云  
傍 小 塚 有 柳 道 灌 公 爲 攻 下 總 牛 葉 構 長 橋 三 余 云 云

朝日神明宮  
樽湯ありて石濱神めとも  
或人の説は此は伊弉諾宮あり或は伊弉册宮あり  
或は伊弉册宮あり或は伊弉册宮あり

人皇四十五代聖武天皇の御宇神龜元年甲子九月十日鎮坐と云  
牛頭天王社  
奉社の左の方より樽湯の傍守りて祭礼は毎年六月十五日あり世に流入の押合  
祭として神樂今戸橋をワケをせり氏子の輩らとて神樂舞を其神樂と

角田河渡

名子

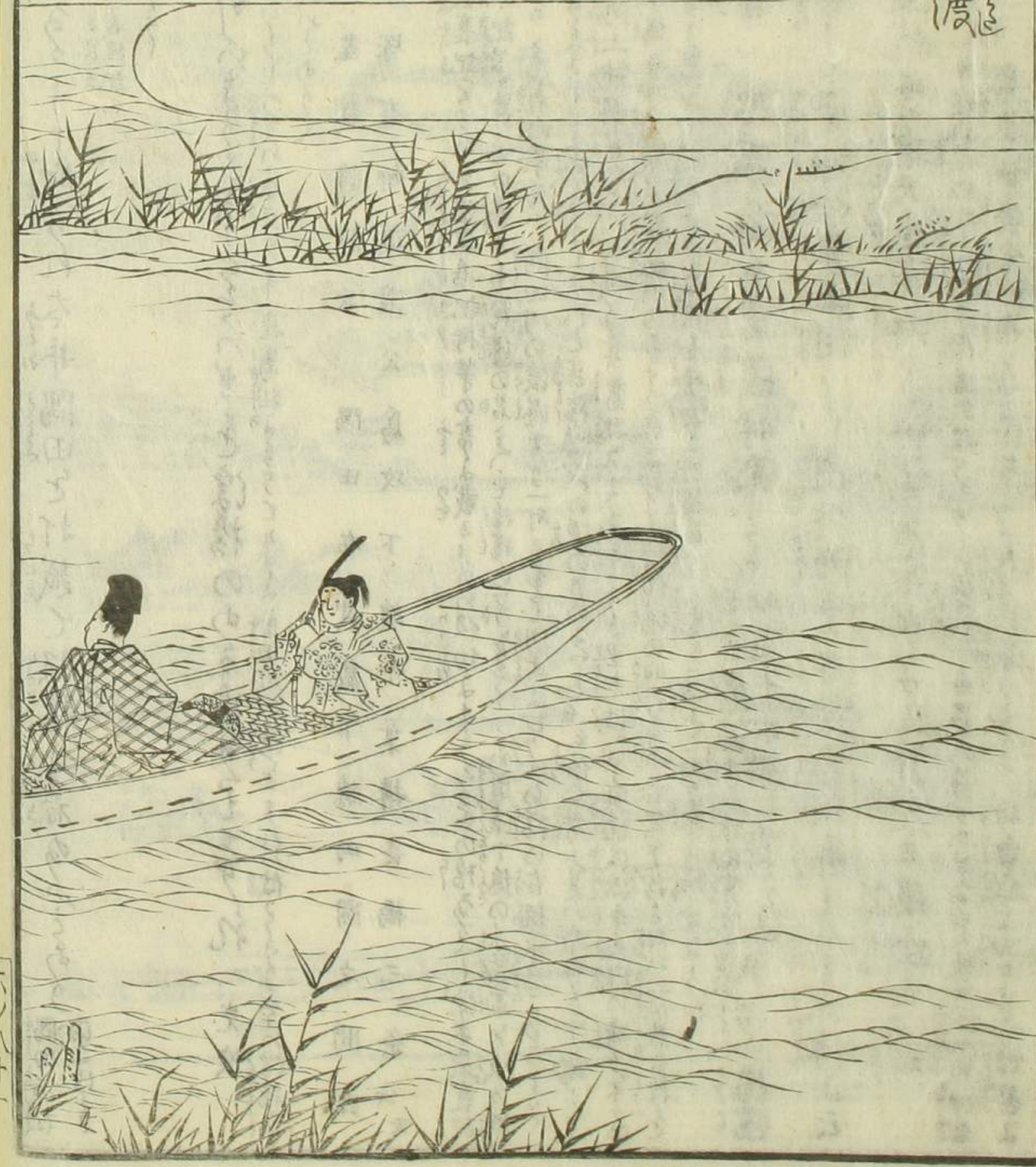
あつ

うき

うき

穴ん

都鳥



家

うき

ひと

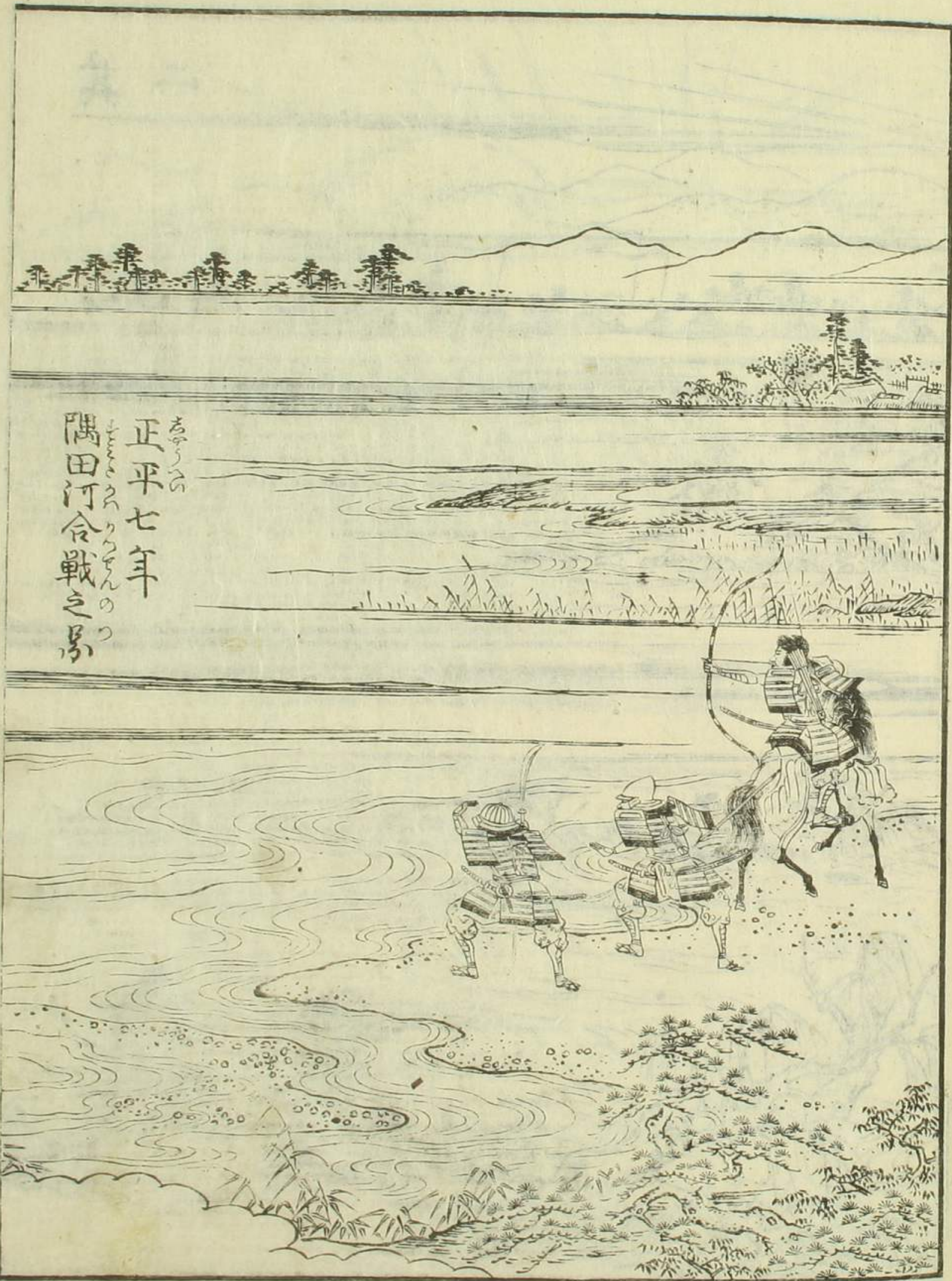
あつ

うき

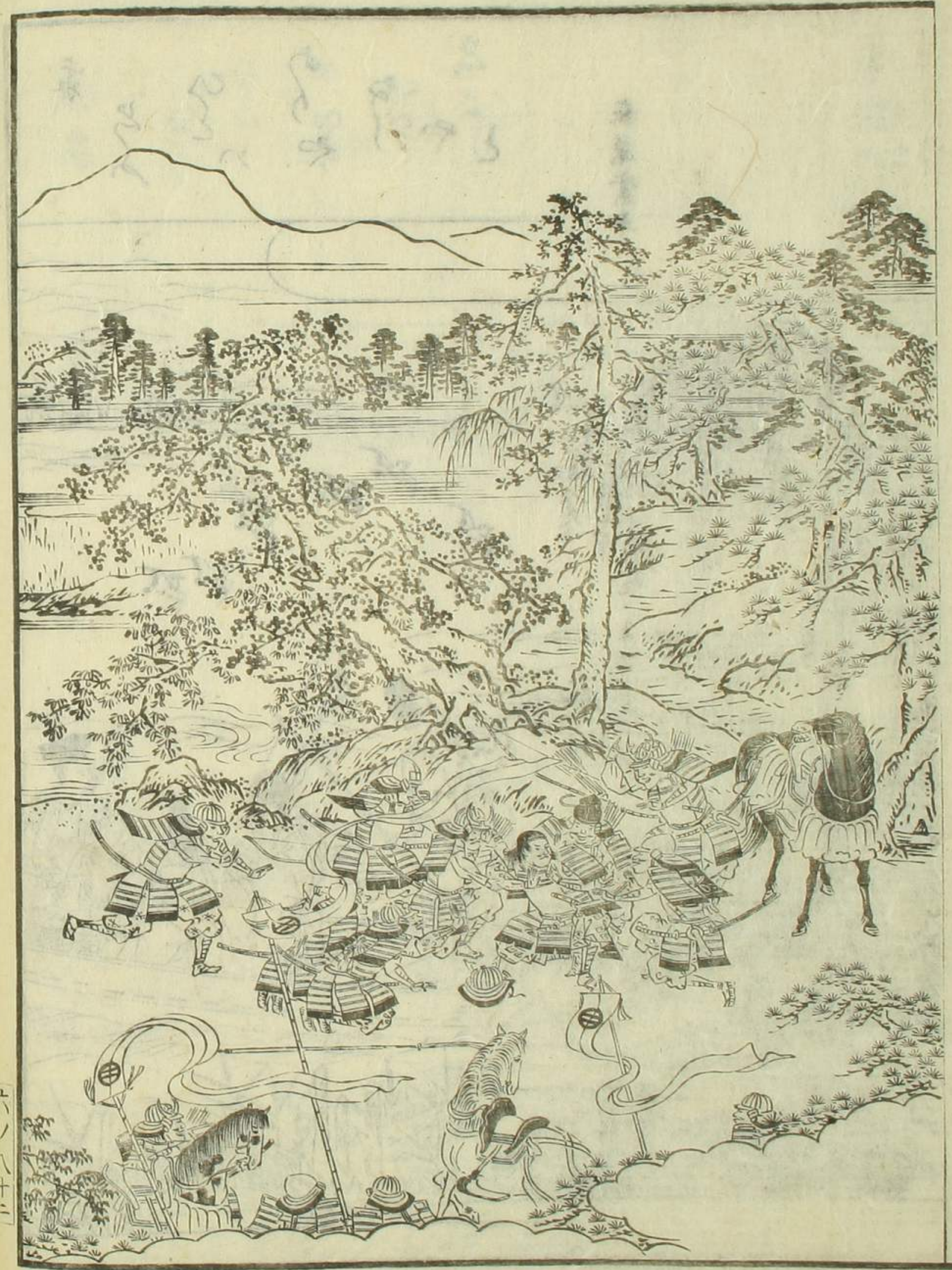
とや

在原業平

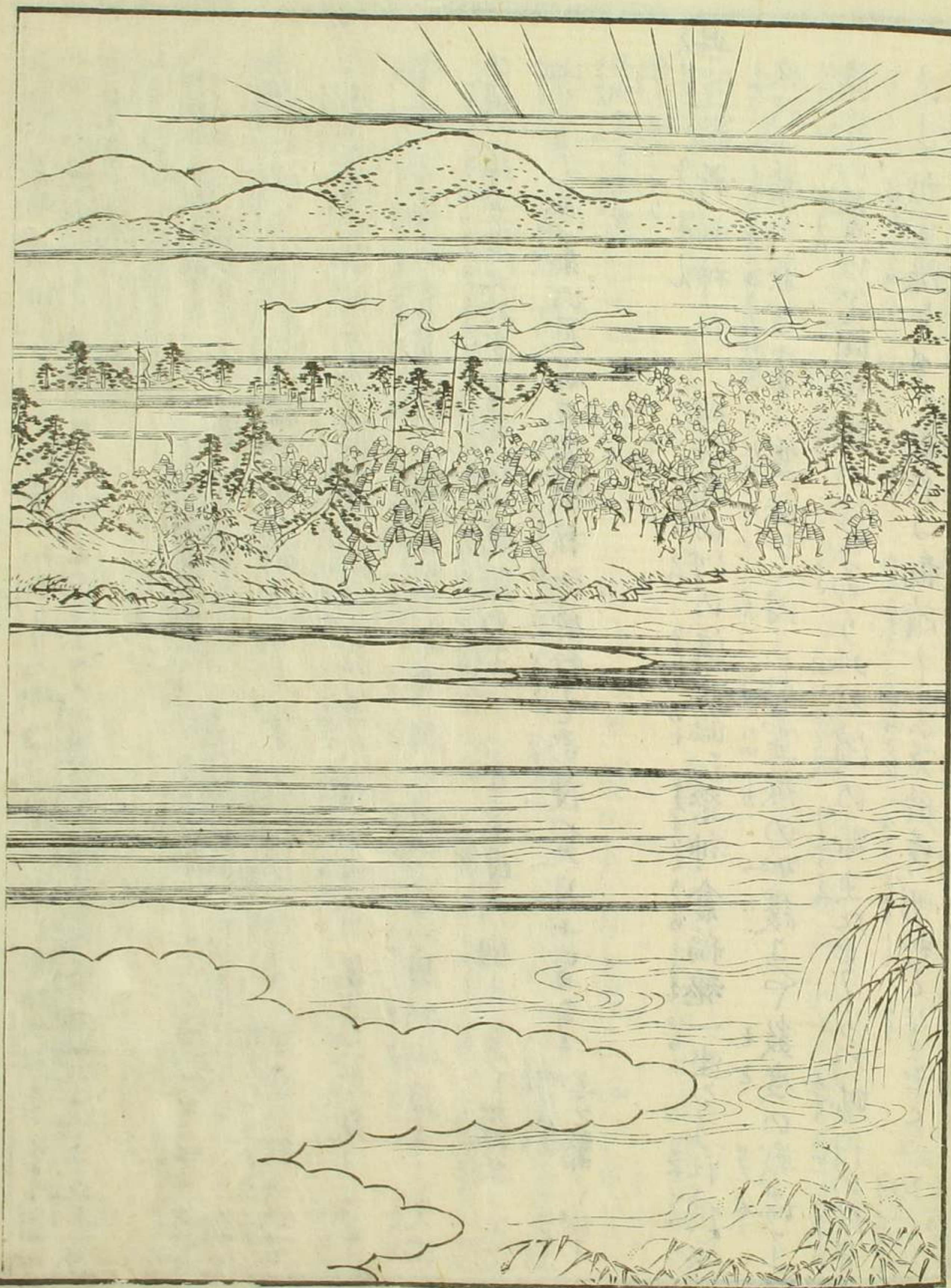




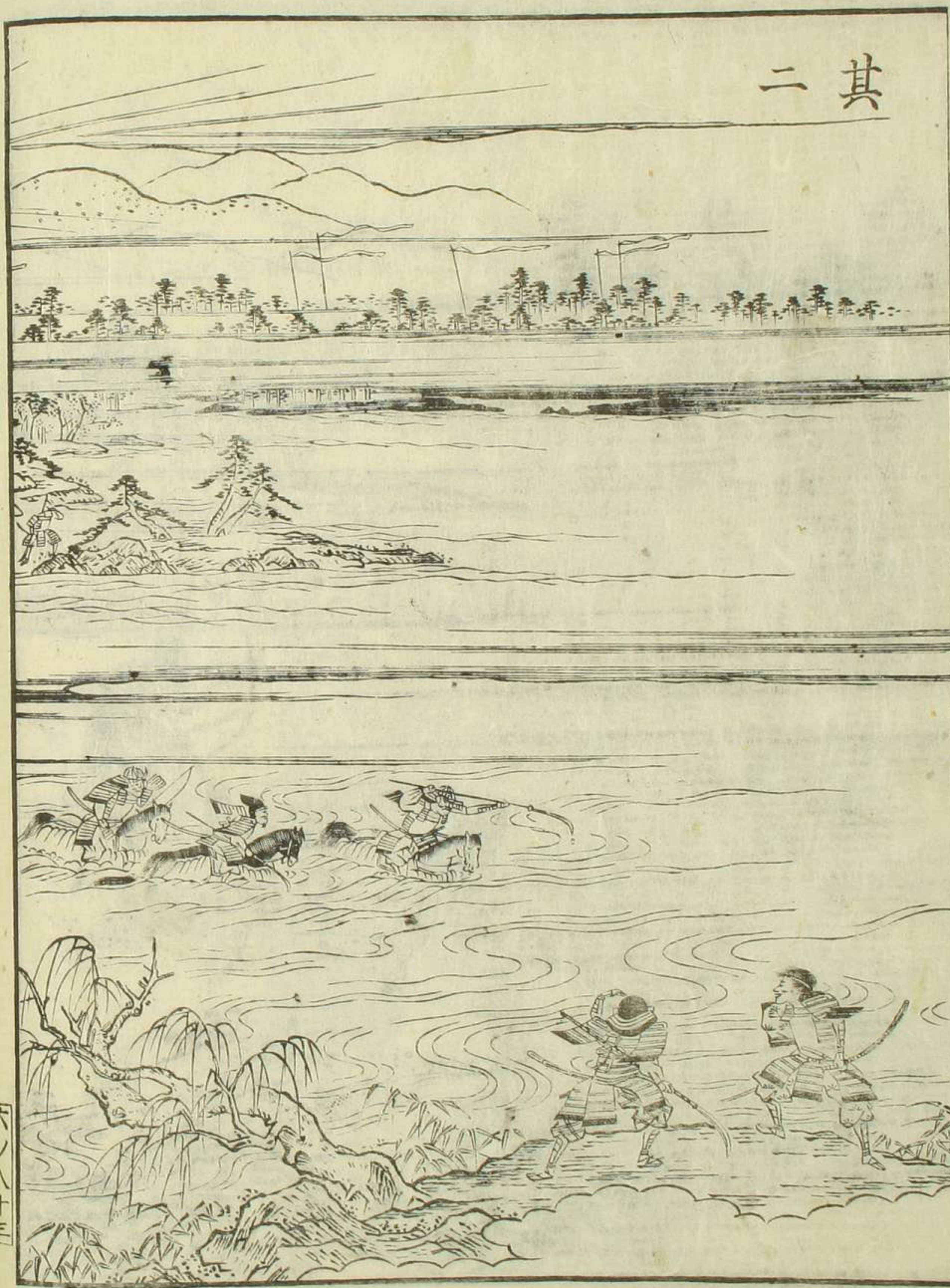
あきつひの  
正平七年  
隅田河合戦之景



六十一



其二







士残王止る先途を支る向は月も既く酒のりきりて河の瀬瀬も見え

つらされの義家も續てつらさるもあると又後よりはく味方もあつたれん

おのぬりのゆれと牙をむいて卒陣引歸さばくとあり以上右平記の意を採る

砂尾不動院 檜場寺と号と渡辺のわく南の古道より有るあり天台宗

ゆて法草寺は属日住持の法相宗あり住持教圓師の代長寛癸未歳より宗風を好む 宝龜四年癸巳良辨僧

の上足寂昇上人當寺を定基一卒号は不動明王の像を安と

縁起曰卒尊不動明王の良辨僧都相別大山寺小あり頃彫刻あり

三跡の一より彼寺の卒号と同本同作あり僧都一時上足寂昇師小告

て云く三跡のうち一跡は此山より一跡はさつちり持念を殘る不の一跡

は故に附屬とへ何方とも有缘の地は安とへとあり仍て僧都化寂

の後宝龜四年歳寂昇上人上總の方へ行く道の次適此地より霊告を

得て有缘の地たるを志せり安とへ一則村老所人よりひく草堂

を營て砂尾不動尊と号云云砂尾薬師如來寺内より卒号と

惠公僧都の作あり南無亭茶菴云云或説く此妙く住持砂尾徳理を夫とけんあり

妙龜山總泉寺 曹洞流の禪林より江戸三箇寺の一員なり永祿二年四月小茶菴の有限は武勅石俣の會下とあり

宗俊和尚と号と當寺は千葉家の番花院あり

千葉氏墓 境内卯塔のうらより長く大なるの青石の枕字のを講めと卒号法名ホ

昌燦大居士とあり寺僧云く守衛の弘治二年丁巳十月八日卒とされと守衛卒去り時此とあり

墓碑より良公自風流とありと記す

宇津宮跡三郎入道墓 卯塔のうらより大なるの青石の碑二枚其一は正女元年

按は當寺はゆいけしる不の寺は法海三郎の頼綱入道實信ゆらあり又の号を蓮生と唱ふ

源宗上人の法を承て後善惠上人と稱て出たると云え元年己未十月京師より遺言より遺言を師

の石塔の傍に儼るより西山上人の侍に見えり其地は則京師西山三法寺の東の隅より依て考ふる

又當寺より不の月のひり其の族より此地よりありて寫し建る不の墓碑よりんをさんと云安

余年より最不審少のらむ

柳當寺は正法眼藏の妙理を志め一實相無相の心印をひらく向上の一路





按二和譜抄記二西園寺大改大后公経の四男四進権大納言三二位實藤公朝  
延宝五年丁巳六月廿七日薨と云々六十八とあり實藤公朝の女貞子永仁の間の人なり  
大にたりとあり後二位の位に有るなり延寶八年八月廿二日薨と云々  
附合せりこれと文を糾袂して讀むべし  
齋藤別當實盛墓 後五位德山眞道眞大居士壽永二年卯年五月廿七日と刻  
保法上人元泰和尚之墓 七年甲戌五月廿一日夜靈夢を感一孫兵衛助信利是を建  
法隆寺上人實盛の氏族より南阿茶話よりえたり法名其頃勸修寺よりと云々  
實盛の墓あり

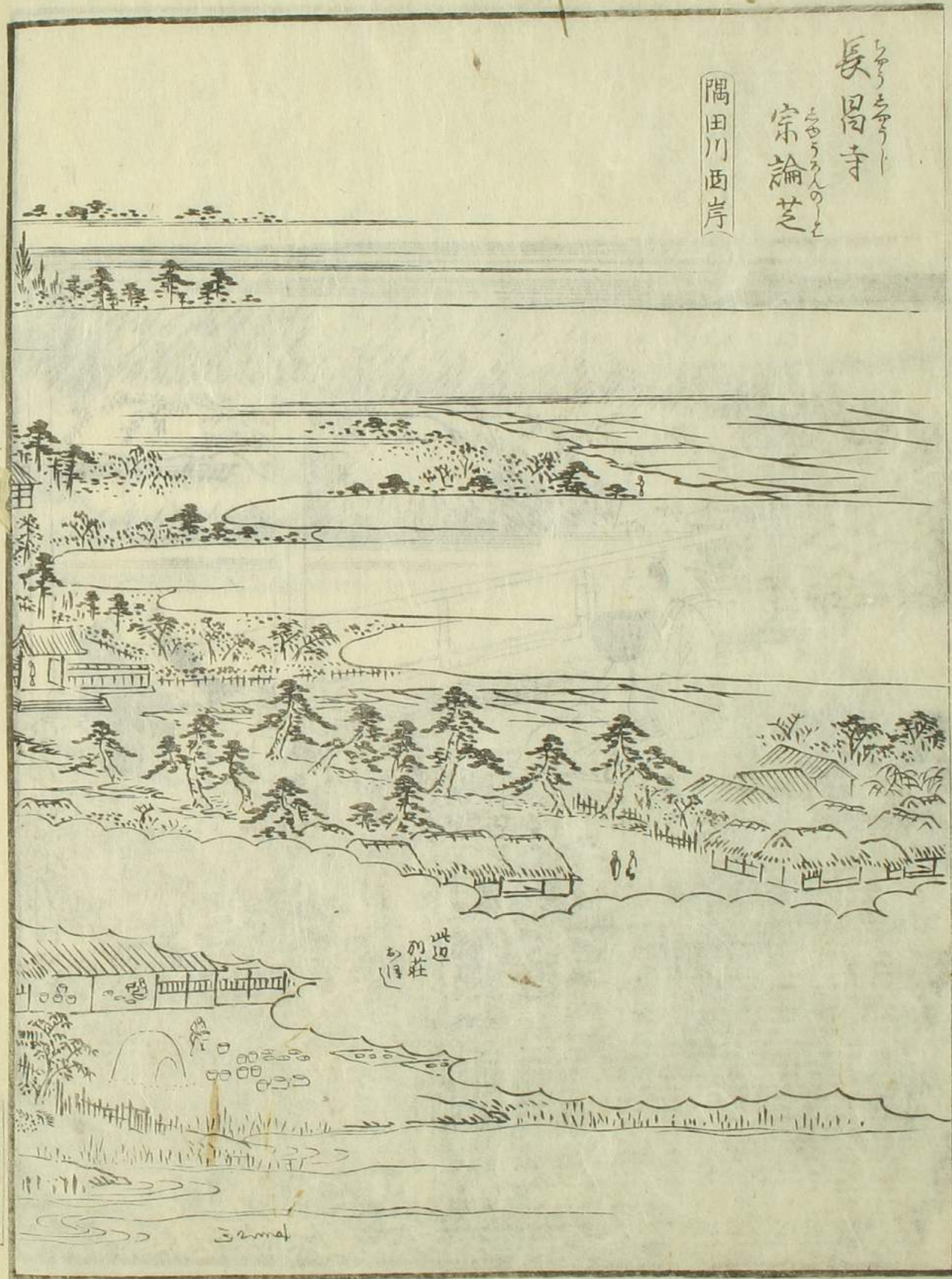
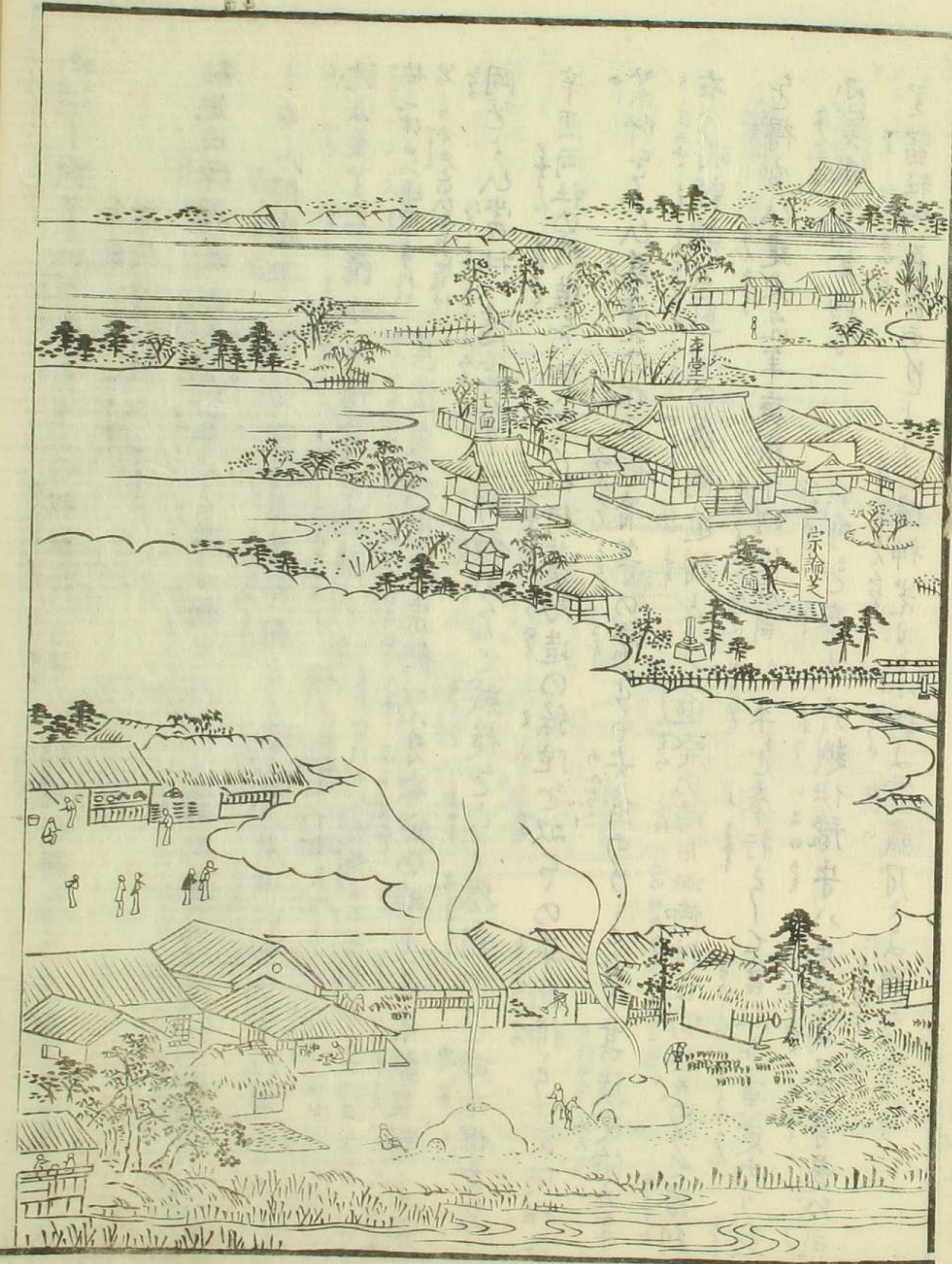
鎌倉権左夫景道石塔 日野あり碑面向阿弥陀佛佛佛佛佛延久二年戊午十月廿二日  
其の造るにありんを景道の鎮守府將軍良兼四代の孫大納言村野小五郎忠通の墓なり  
其の墓あり實盛の墓より西にあり  
号を刻りて實盛の印塔の中よりなり  
されども故の近年散失して去りて

當寺の天台宗の古跡ありて保元年間中興して保元寺と号しり通の後  
たの荒廢せり明蓮社聽譽上人西仰和尚の時より天台宗を改めて淨家  
小禪と其時より文字も法海ありにり寺院再興ありと云  
深榮山長昌寺 法源寺の南隣る當寺の御府内日蓮宗の古跡ありと延山

小属日蓮山日寂上人始淺草寺の住職より上右の天台の法流を汲り  
寂海法印と号しり弘安二年巳卯所より於て日蓮上人の弟子日常上人と  
宗義を討論せり 或人の宗論あり弘安五年壬午の事 後小日蓮の宗風を歸し身  
延山に登りて宗祖上人の湯一弟子の禮を執る名を日寂と改後淺草寺  
歸り金龍を辞して庵をひひ妙智寺と号して隠る後所の西僧も  
又とも小受戒して日増日可と改む同九年丙戌十一月一日日寂上人歸寂と  
積聖境内の庵の中より 依り其後日増 日可 精舎を搗場の比小建て  
長昌寺と号しり當寺新鑄の鐘の銘に其比え隅田町に接し偶水難を罹  
堂塔漂流鐘亦沈没と其所を鐘ヶ洲とりの後より元亨元年辛酉寺を今  
の比に移すとあり 按て鐘ヶ洲の由来は龜戸村普門院の鐘の銘よりありと云々  
宗論 平堂のまへにありて扇の形に作らるる生の中中央に松樹一株ありて  
世に示さんなり 寂海法印の自常師は於て宗教を叩いた竟り日蓮大士の法流を歸り證と永

今戸八幡宮 今戸橋より一丁を北の方道よりをたれあり祭神山御石清水





長閑寺  
ちやうけんじ  
 宗論堂  
しゆんろんだう  
 隅田川西岸  
すみがわにしぎし

小戸一別當の天台宗より七松林院と号し祭禮の毎年八月十五日より一

放生會を後行せり

社記曰源頼義朝臣義家公と共に勅を奉りて奥別安倍貞任宗任を誅戮

しゆの仍康平六年癸卯八月其祈願より鎌倉君由比郷より小戸

地に至り石清水八幡宮を勧請あり今戸社記に今律に作る小戸原北条家の分限帳あり

其後奥別武衛宗衡足利敏成の時も義家朝臣鎌倉君鶴

岡より小戸社八幡宮等より祈願ありて賊徒を亡し勝利あり故永保元年

辛酉両社の修造を加われ行基彫造の弥陀を双々の本地佛より又同作の

茶師より慈覺の作の観音等の像をも安立ありとなり其後文治五年

右大将頼朝公奥別の恭衛追討より進発の時も此御神より祈誓ありて勝利

を得ありて建久元年庚戌下河辺庄司行平を奉行より宮社を重建あり然

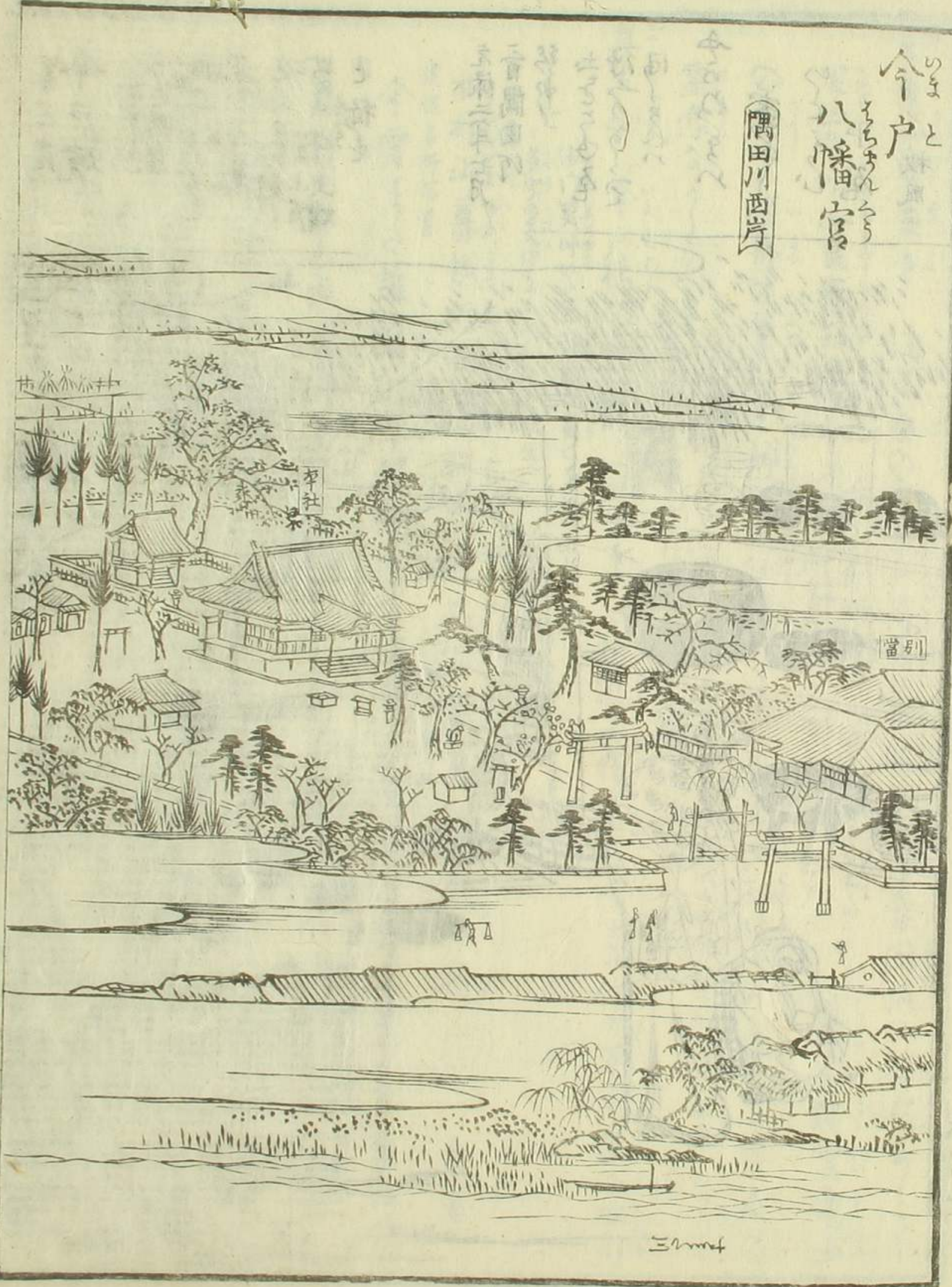
小寛永十三年丙子台命を奉り舟越伊豫守八木但馬守等是成司

了當社御再興ありより己降神先日小新の靈威月より盛るる

今戸

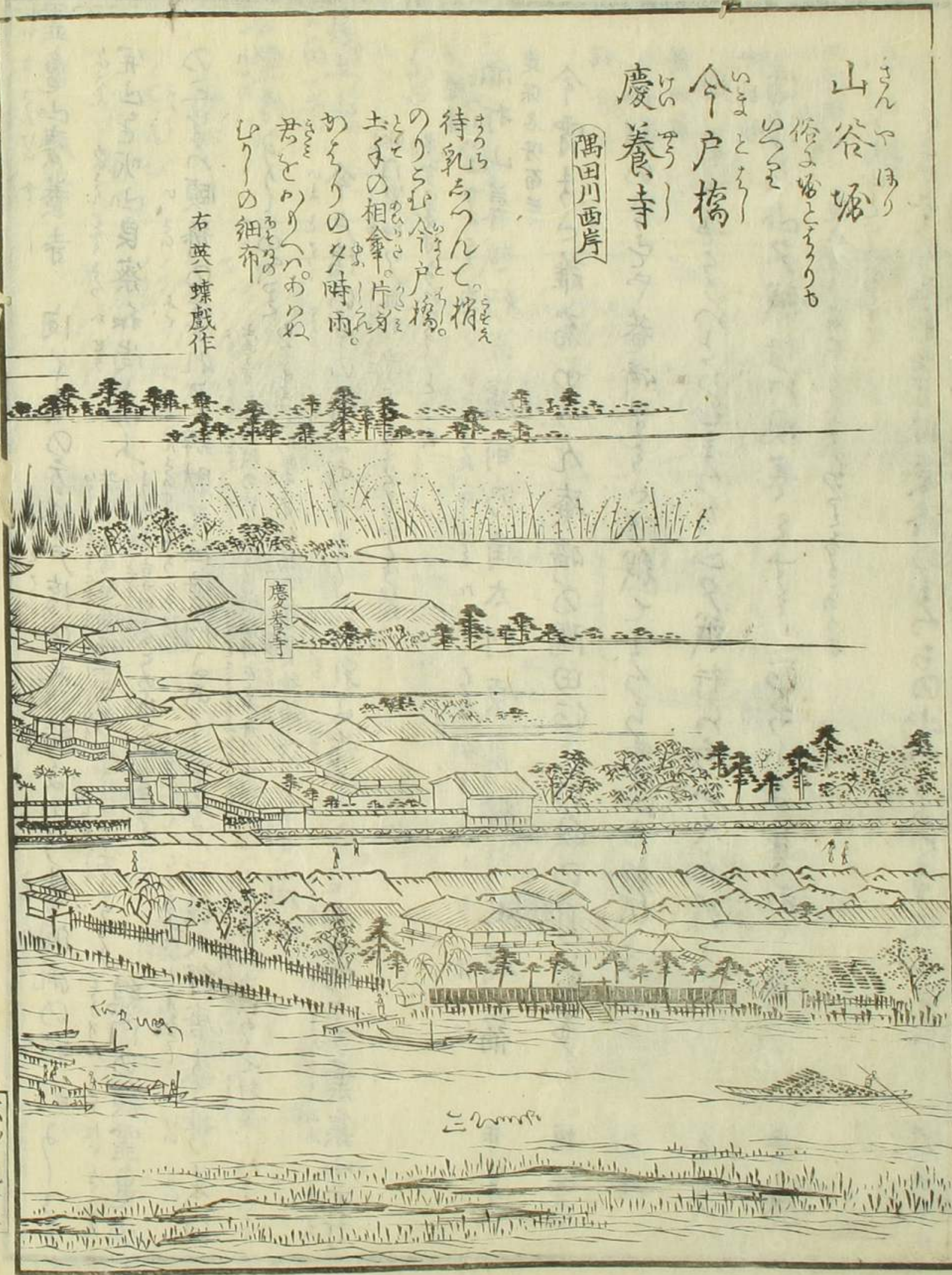
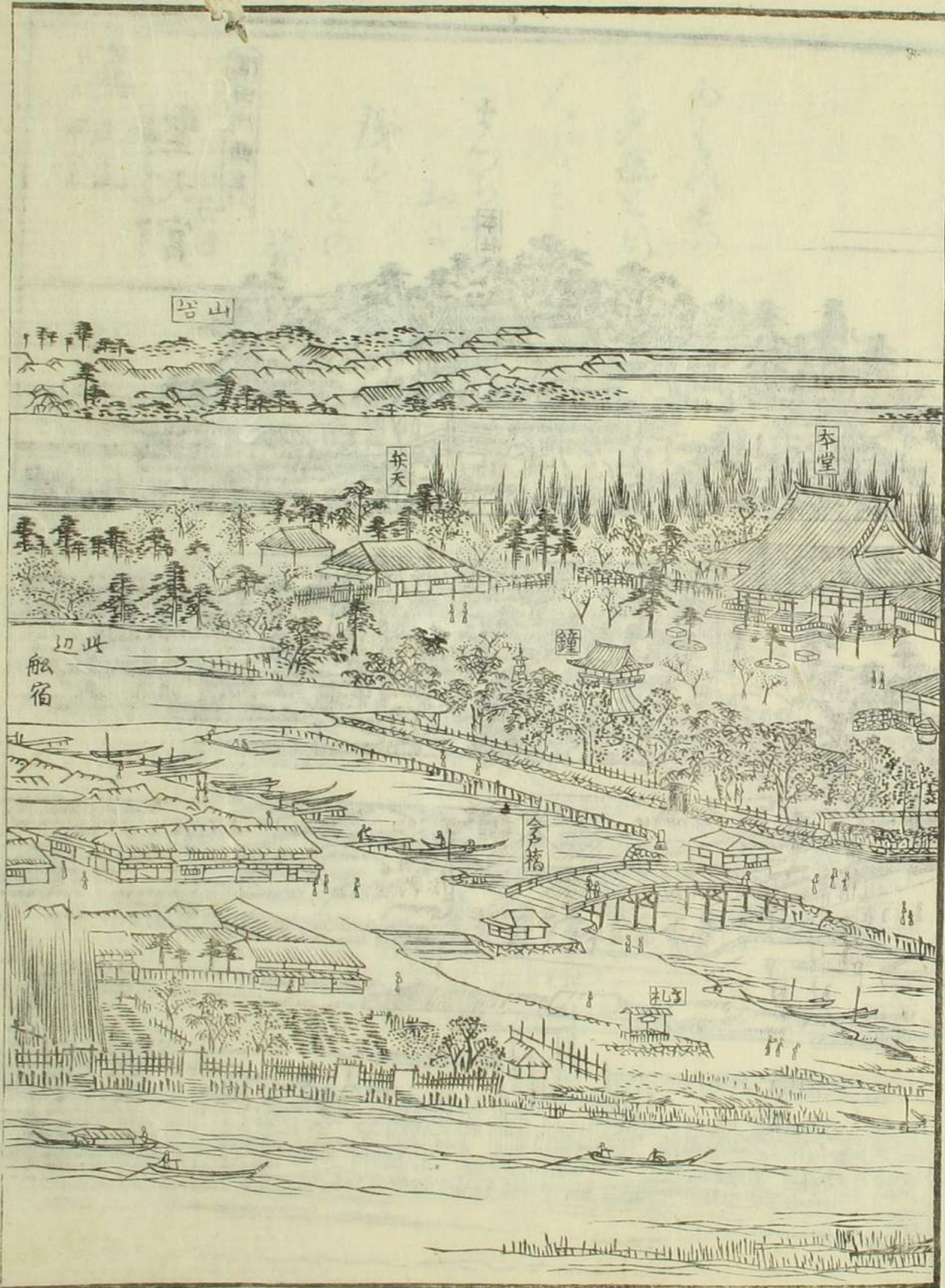
八幡宮

隅田川西岸



三ノ四





さんやほり  
山谷堀

俗名堀とらうりも  
いづれ

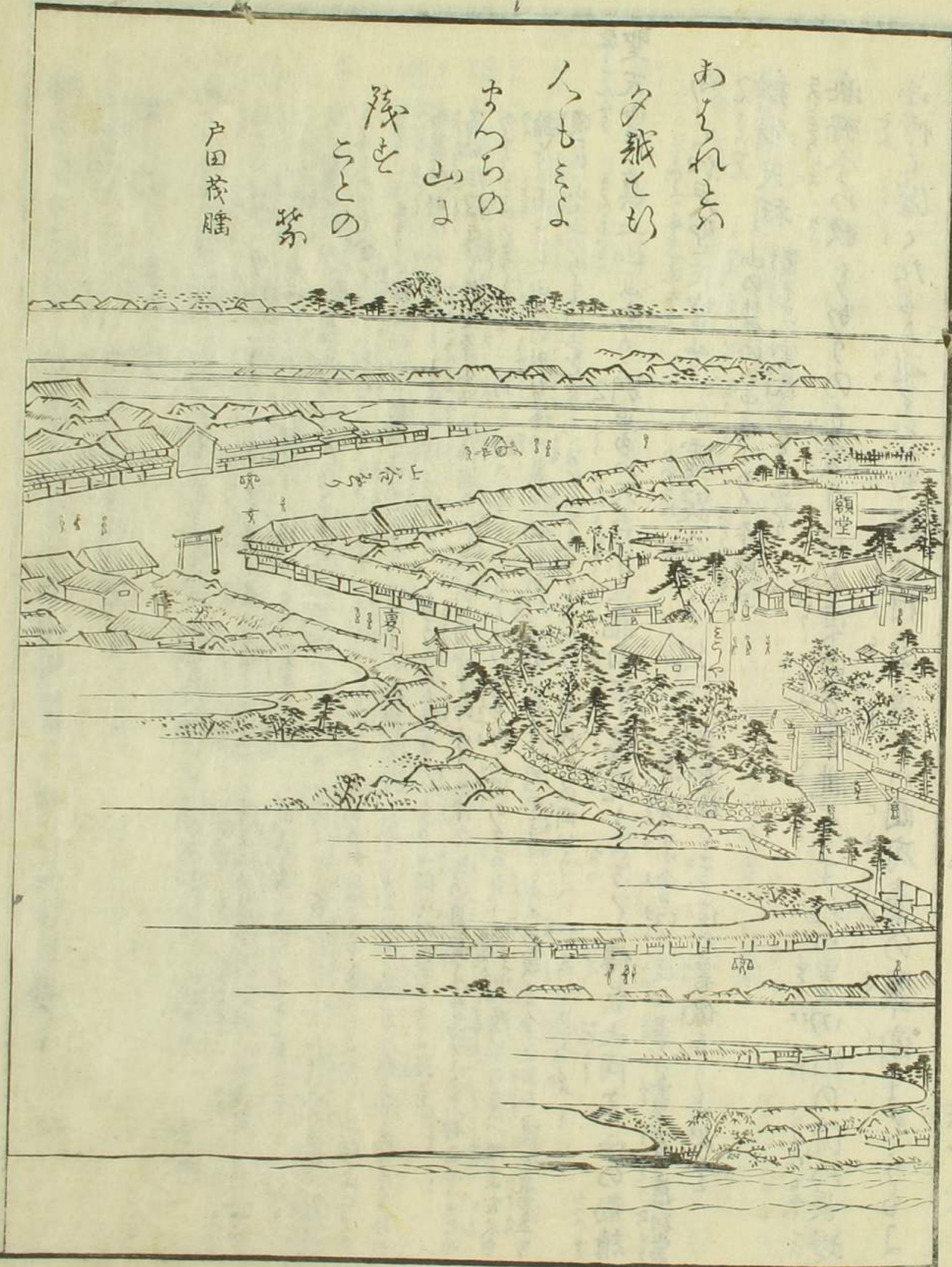
いまとらうり  
今戸橋

いづれ  
慶養寺

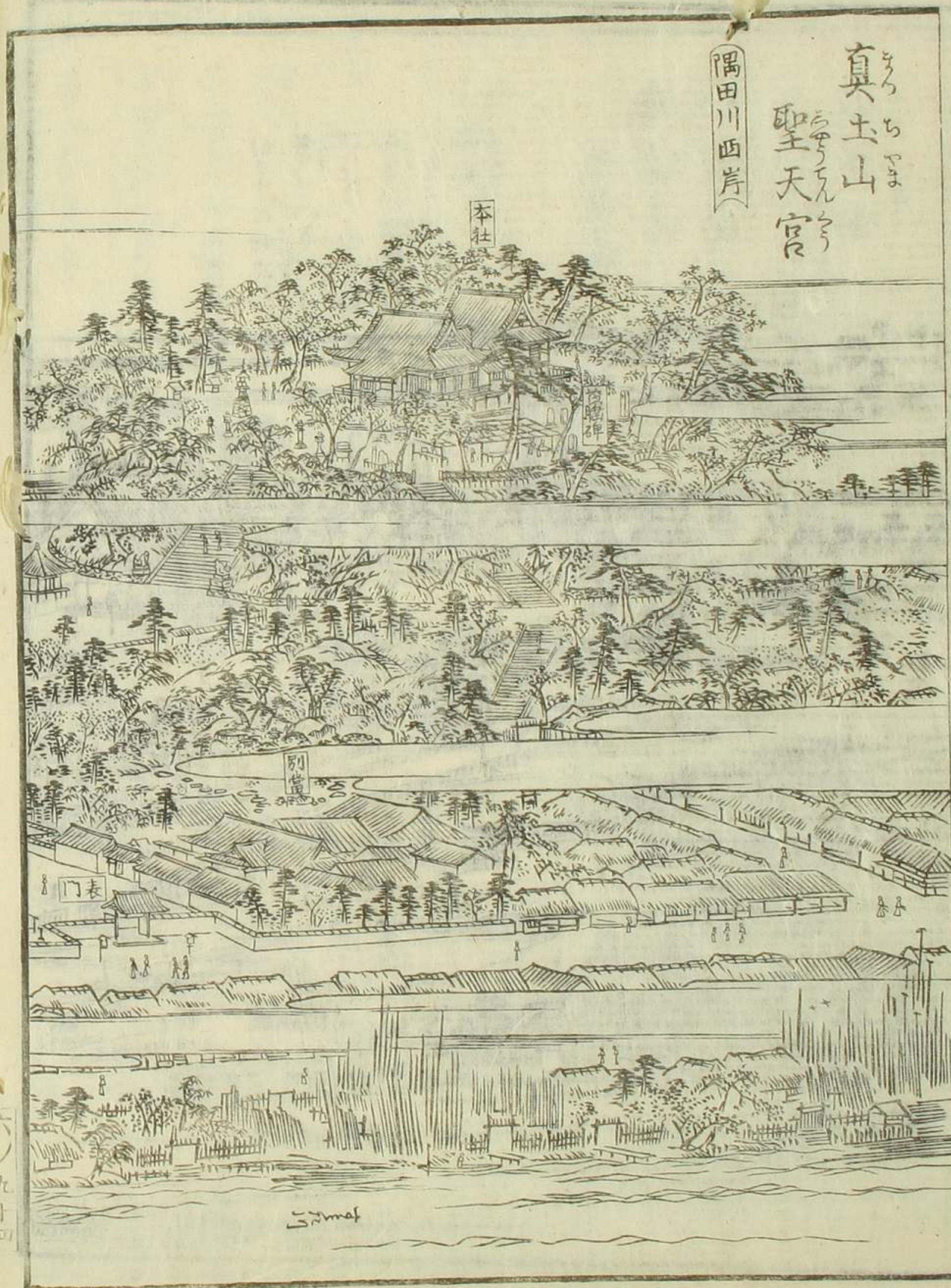
隅田川西岸

待乳らうりて  
のりらひ今戸橋  
土手の相傘片  
あまりの夕時雨  
君とりのりへあられ  
いりの細布

右英一蝶戲作



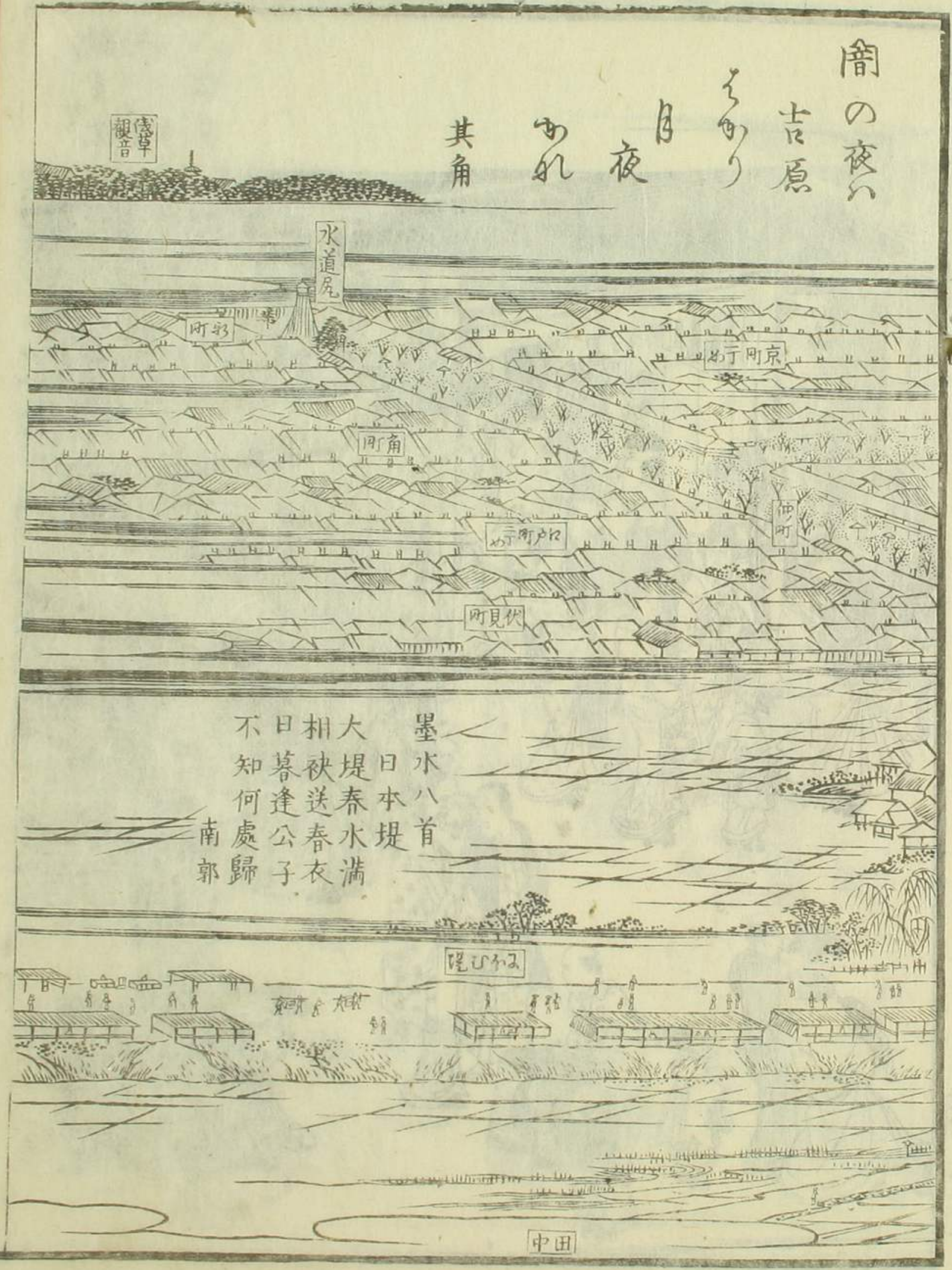
あまれと  
 夕飛と  
 人もまよ  
 ちんちの  
 山よ  
 後と  
 ことの  
 紫  
 戸田茂膳



真土山  
 聖天宮  
 隅田川西岸







闇の夜

吉原

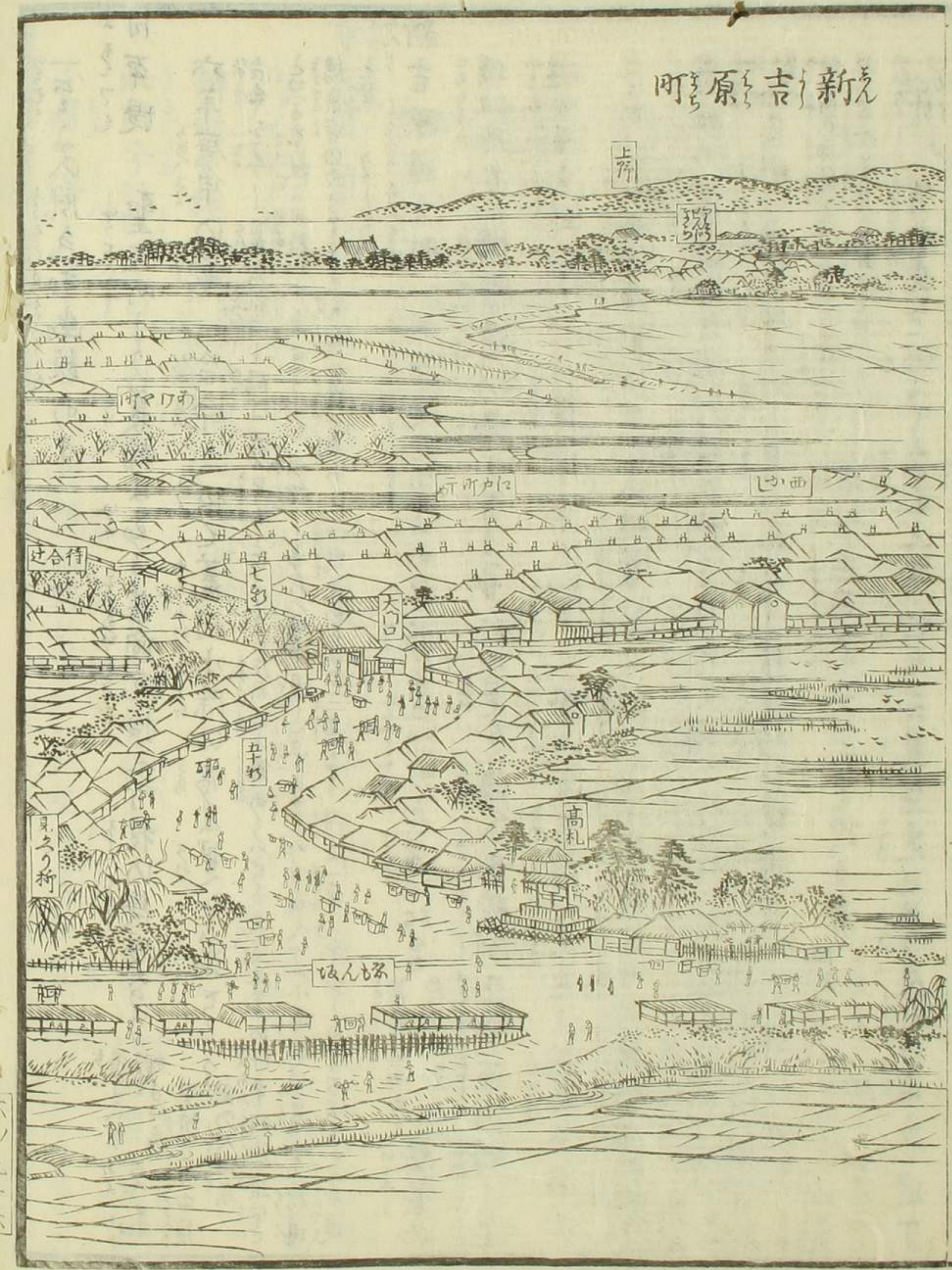
月夜

其角

遠望

墨水八首  
日本堤  
大堤春水滿  
相送春衣  
日暮逢公子  
不知何處歸  
南郭

中田



新吉原

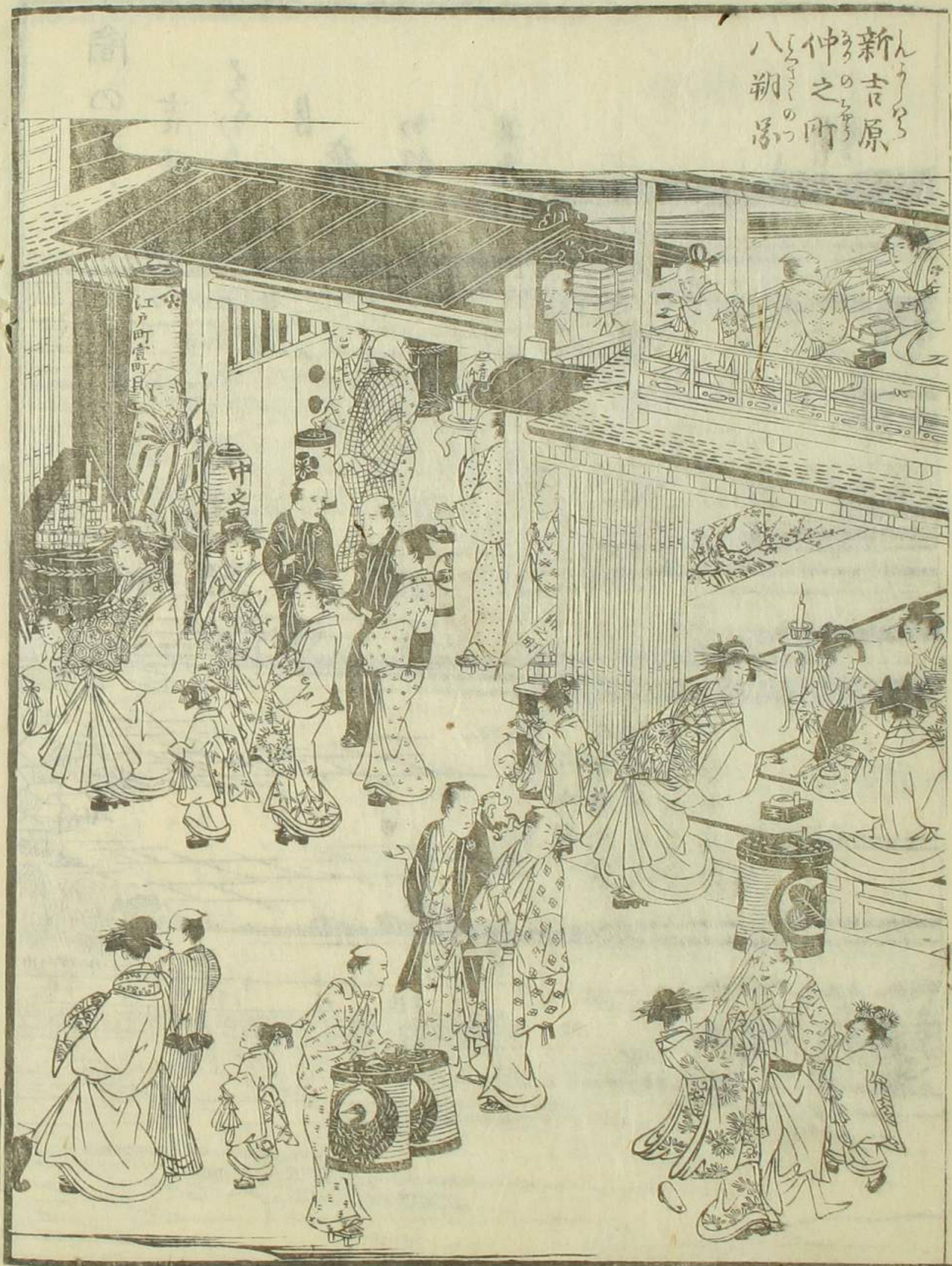
上河

新橋

六ノ九十六



新吉原  
仲之町  
八潮



四方の地を賜ひ是は吉原町と号す  
今所謂和泉町高砂町住吉町難波町等其の地なり  
あつては嗣一故に原もいへりしを賈して吉原と作しつる或は事御合考をいひ  
え福元極の江戸産又その書より其始發別え士をありうつと故にこの号ありと云ふ  
五羊番請  
 落成と然るに江戸益繁昌一人萩蔓と云れり  
明暦二年の冬竟る今この  
あつては嗣一故に原もいへりしを賈して吉原と作しつる或は事御合考をいひ  
え福元極の江戸産又その書より其始發別え士をありうつと故にこの号ありと云ふ  
五羊番請  
 所より習地を賜ふ  
明暦二年丁酉  
八月今の地なる  
 依て新吉原所と号するといふ  
此花柳の事  
あつては嗣一故に原もいへりしを賈して吉原と作しつる或は事御合考をいひ  
え福元極の江戸産又その書より其始發別え士をありうつと故にこの号ありと云ふ  
五羊番請  
 小三都の魁乃其賑ハ特殊生の花の頂をりて務たりと  
あつては嗣一故に原もいへりしを賈して吉原と作しつる或は事御合考をいひ  
え福元極の江戸産又その書より其始發別え士をありうつと故にこの号ありと云ふ  
五羊番請  
 千金を顧と初秋の燈籠ハ万字屋の玉菊り追橋より  
あつては嗣一故に原もいへりしを賈して吉原と作しつる或は事御合考をいひ  
え福元極の江戸産又その書より其始發別え士をありうつと故にこの号ありと云ふ  
五羊番請  
 巴屋の高橋よ起る今も批目をりて更衣の節と云ふ  
あつては嗣一故に原もいへりしを賈して吉原と作しつる或は事御合考をいひ  
え福元極の江戸産又その書より其始發別え士をありうつと故にこの号ありと云ふ  
五羊番請  
 全盛のいふもさうらゝるを悉く其美を擧かりと  
あつては嗣一故に原もいへりしを賈して吉原と作しつる或は事御合考をいひ  
え福元極の江戸産又その書より其始發別え士をありうつと故にこの号ありと云ふ  
五羊番請  
 是を累と

江戸名所圖會開陽之卷終

早稲田大学図書館

011688984990